SEIJU

2020年

第50巻

冬季

成寿

十一面観音像

謹啓

師走の候、御一統様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、今回善光寺季刊誌「成寿」第五十号をお届けいたします。

この号は特に当寺二世中興大圓武志大和尚十七回忌法要と観音堂観世音菩薩像開眼式を特集致しました。ご高覧頂ければ幸いでございます。

コロナ禍で不安の募る中ではありますが、日々を穏やかに過ごす一助となれば幸甚です。

皆々様のご健勝をお祈り申し上げますと共に今後とも尚一層の御法愛、御教導賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

謹白

令和二年十二月吉日

横浜善光寺　住職　黒田博志　合掌

横山大観
海三五庵

観音堂　観世音菩薩

■特　集

善光寺二世中興大圓武志大和尚十七回忌法要

善光寺二世中興大圓武志大和尚の十七回忌法要が令和二年十一月八日午後二時から、焼香師に第五教区長・倫勝寺ご住職馬塲義實老師をお迎えし釈迦殿で営まれました。

コロナ禍の現状を踏まえ当初の予定より規模を縮小し、感染拡大防止対策をとりながらの法要となりました。

倫勝寺　馬塲義實老師

倫勝寺様は、先代ご住職様（馬塲道男老師）と善光寺先代が同級生（三心会）の間柄。また現在、馬塲老師は善光寺の所属している曹洞宗神奈川県第二宗務所第五教区教区長をお勤めになられていること等のご縁から焼香師をお勤め頂きました。

法要後のご挨拶でも先代住職の姿やお声が浮かんでくるようなお話を頂きました。

次いで檀家総代を代表して山口義男護持会会長のご挨拶。

最後に博志住職から、昨年より計画をしていたこの法要について、コロナ禍の状況下で行っても良いものかを各方面と相談し、悩みに悩んだ心境を吐露し、「それでもこのように法要を営むことが出来ました事、皆さま方のお陰です。衷心より篤く篤く感謝申し上げます」と謝辞を述べられました。

観音寺　黒田法正老師

釈迦殿での法要後、一同は小高い丘陵の上にある歴住墓を参拝。観音寺ご住職黒田法正老師ご導師のもと詣塔諷経が執り行われました。

博志住職の従兄でもある黒田法正老師は、祖母黒田嘉様の着物を使って御母堂が縫われたお袈裟を着けられて法要に臨まれました。

法語で「気清志高圓法縁」と先代を偲び、「師学相承報恩道」と博志方丈が先代に学び相承している姿を表現されました。日頃より共に檀務をお勤め頂いている法類の法正老師ならではのご導師をお勤め頂きました。

三密を防ぐなど感染症予防対策を行う意味でお斎の席は設けずにお弁当をお渡し、観音堂の観音様をお参りされての散会となりました。

カラー■特集　善光寺二世中興大圓武志大和尚十七回忌法要……1
法話●住職法話　「人を思いやる心」　『生きる力』令和二年お盆発行より…黒田　博志　18
連載●『普勧坐禅儀』に学ぶ　その十四……安藤　嘉則　22
法話●「梅花流詠讃歌の歴史と曲の紹介」……渡邊　清徳　28
●「観音さまは　どこ」……水庭　浩章　38
カラー■観音堂　観世音菩薩像　開眼式……49
■開山忌　■善光寺留学僧育英会辞令交付式……52
アーカイブ■第二十四巻（一九九五年）・第二十九巻（一九九九年）より……黒田　武志　58
●育英生からの報告……浅摩　泰真　67
●ニュースアラカルト……78
●善光寺霊園ニュース……110
お知らせ●留学僧募集、毎月の催事……116
育英会寄付　126　普門寺からのお便り　128　育英生からのお便り　135　読者のたより　136
編集後記　144
……題字・イラスト　伊藤三喜庵

巻頭言

善光寺住職　黒田博志

本年、新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい、未だに収束の糸口が見いだせておりません。この感染症により尊い命を失われた皆さまに深く哀悼の意を捧げますと共に罹患された皆様におかれましては、一日も早いご回復をお祈り致します。また極限に近い状況の中で治療にご尽力頂いている医療従事者の皆さま、並びにこの

緊急事態の中にあって日々の生活を支えて下さっている多くの方々に敬意を表します。

三月春彼岸。寺では、今までになかった一斉法要参列中止。開創以来寺檀一体となって勤めてきたご先祖さまのご供養を急遽、僧侶のみで執り行うことと致しました。感染症拡大防止の為とは言え寂しくつらい判断でした。

続く盂蘭盆施食法会では同時刻にご自宅のお仏壇の前で一緒のお勤めをお願いしましたところ大勢の皆さまがご一緒にお勤めして下さったとのお話を頂戴しました。形は変えても寺檀一体は続いている、その有難さに胸が熱くなりました。新しい生活様式の中でも皆さまの心にやすらぎが訪れますように寺として精一杯勤めて参ります。

十一月には師父大圓武志大和尚の十七回忌法要を倫勝寺ご住職馬場義實老師に導師をお勤め頂き厳修。続く詣塔諷経では観音寺ご住職黒田法正老師導師のもとお墓参りを行うことが出来ました。

この時期に法要を行うことについて悩みに悩みましたが、関係各位のご理解とご協力を賜り執り行うことができ安堵致しました。衷心より篤く御礼を申し上げます。

その師父の誓願でもあった観音堂も完成し、観音さまをお迎えすることが出来ました。昨年の開創五十周年記念事業として計画された観音堂。師父十七回忌という節目での完成は、仏天のご加護はもとより、ご縁のご寺院さま、檀信徒みなさま、地元の皆さまのご理解とご協力ご支援の賜物と感じております。

観世音菩薩様。観音さまは私たちの声を聞き、お救い導いて下さる仏さまです。また時に声にならないような苦しい思いも観て下さる仏さまです。観音さまはいつでも観護(みまも)って下さっていらっしゃいます。

社会全体が閉塞感に包まれ、人々が悩み苦しむこのような時期だからこそ、お迎えすることのできた観音さまの意味を受け止め、更にそのお力を最大限に発揮していた

だけるよう私自身も精進して参りますので、皆さまもぜひ観音さまとご縁を結び共にこの難局を乗り越えて参りましょう。

来る年も善光寺は皆さまと共に歩んで参ります。今後ともご指導賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

■特　集

令和二年十一月八日

当山二世中興
大圓大和尚十七回忌

【ご挨拶】

焼香師　倫勝寺　馬塲　義實老師

みなさんこんにちは。当五教区の教区長を勤めさせていただいております戸塚区の倫勝寺馬塲義實と申します。いつも善光寺さまには当教区のいろいろなお役をお引き受け頂き、また神奈川県東部総和会の方でもいろいろお世話になっております。

お葬式の日からもう十六年経ちますけれども、私など若輩が申し上げるのは失礼かとは思いますが（住職として）重たくなられたなと、そんなふうな気がしております。

皆さま方の中にはうちの先代の住職をご存じの方もいらっしゃることと思います。先代との関係もあり、また、私が教区長ということもあって今回焼香師をというお話がありました。当初は観音堂の落慶を含めて盛大な行事を予定しておられたと伺いましたが、このコロナの情勢がなければまた違った形で多くの方にご縁を結ぶような非常にありがたい法要となったことであったかもしれません。非常に残念であったことでありますけれども、当山先代ご住職は「それでも良い。今のままで、出来る限りのことをせよ！」とおっしゃられると、私は思います。

今回このように焼香師を拝命し、さらに何か一言お話をしなさいということでありました。送られてきた差定（役割表）や出席される方の

お名前を拝見すると、とてもとても私がなにかお話をできるようなことではありませんので、一体なにをお話し申し上げて良いやら考えたわけでありますが、先代同士が法友との関係に免じて少しだけお話しさせて頂きたいと思います。

うちの先代住職は平成八年四月十五日、大本山總持寺様のお授戒の最中にご本山で亡くなられました。私が馬場家に婿に入りまして、まるまる一年の時でありました。そんな状況ですからまだまだ右も左もわからないなかで密葬をし、荼毘、本葬ということでありました。

密葬は一週間後、本葬は一か月後となりました。途中でどれだけ寺を投げ出して帰ろうかと思ったことでしょう。本当にありました。困った、どうしよう。全くわからない状況でありました。そんな中たくさんの方に支えられて本葬の日を迎えました。

先代の黒田住職には同級生、また三心会の関係もありましたので、鎖龕（さがん）仏事という棺に鍵をかけるお役の仏事師をご依頼させていただいたわけであります。二つ返事でお受けいただき、当日の鎖龕仏事の時が参りました。博志さんも本葬の時そうでありましたけれども薄ネズミ色

の涅槃衣と言われる衣を着て棺の脇の所に立っておりましたところ黒田前方丈さまは、堂々たるその、なんというのでしょうか、オーラとでもいうのでしょうか、それをもって拝敷、座肉の前に立たれました。

法語がすごく心に残りました。短い法語であったのですけれど、最後の結句のところで、何をおっしゃられるのかと思い聞いておりますと、ものすごい大きな声で、

「身を削り　人に尽くさん　すりこぎの
その味知れる　人ぞ尊し」

とおっしゃられました。

永平寺に安居しておられた方であれば大庫院のすりこぎのところに以前この句がかけてあったことを覚えていらっしゃる方も多いと思います。私も安居中、大庫院におりましたし、伝道部にもおりましたので、何度もその句を眺めながら修行させてもらいました。

「身を削り　人に尽くさん　すりこぎの　その味知れる　人ぞ尊し」……今さら　解説させて頂くわけではありませんが、今回あらためて焼香師のお役をお受けするにあたり、その時の先代住職様の大きなお声で述べられたそのお言葉がありありと甦って参りました。「その味知れる人ぞ尊し」にお前は今なっているのか。そう問われたような感じがしております。「身を削り人につくさんすりこぎ」、理屈は解る。だけど「その味知れる人ぞ尊し」にお前はなっているのか。

先代馬場道男の遺志を継いで、また遡れば東京にお寺を開いた慈宗大和尚、そしてさらに遡れば總持寺瑩山禅師様、永平寺道元禅師様、そして当山の先代ご住職様がよくおっしゃっておられた『宗祖を通して釈尊に還る』、お釈迦さまの思いを君は解っているのか。また改めて問いかけられたそんな気がしたわけです。

「その味知れる人ぞ尊し」……冷や汗をかきながら今日は焼香師を勤めさせて頂きました。これからも時折、向こう側から叱咤激励を頂きながら皆さんと共に精進させて頂きたいと思っているところでございます。

今日は本当にお勤めをさせて頂きよいご縁を頂きました。有難うございました。

【ご挨拶】

護持会会長・総代　山口　義男様

先代方丈様とはお互いに学生時代貧乏旅行をしていた旅先で先代様に声をかけて頂いたのがご縁で、もう六十数年経ちます。

最近、身辺整理をしておりますと昔の手紙等が出て参りました。本日は先代方丈様が両本山の修行を終え実兄の前角博雄老師のもとで修行をするために渡米された時にやり取りをした手紙をサプライズで持ってきました。

私の方からは日本の新聞を送って時世を伝えておりました。東大安田講堂事件や吉田茂元首相の国葬があった頃の話です。

そのお手紙の幾つかを抜粋してご紹介致します。

【先代方丈様からのお手紙・抜粋】

☆一九六七年十月八日

……道元禅師のお言葉通り「眼横鼻直なることを認得して人瞞を被らず……朝々に日は東より出で、夜々に月は西に沈む」の境界を具現せんものと精進努力する異国の人々に接し、宗教の世界は人種の別なく、国境を越えて、斯くあらねばならぬものとの感慨を深くしております。

☆一九六七年十月十五日
　アメリカがいやになったら……今度はヨーロッパ、それで一応世界一廻りがすみますので今度は「若い美人」をワイフに迎えるだけとなります。

☆一九六八年十一月九日
……私は「日本の柱」になる為に努力をしなければならぬと決意を新たにいたしております。
（中略）
　私の父も七十歳ですからもうそろそろ安心をしたいのだと思っています。
　親の元気のうちに何か一つ――安心をさせてやりたいと思いますが、まだまだ時間がかかる事と思います。
（年月日不明）
……一年二ヶ月と一口に申しますが大変なものですね。何もない平和な一年なら話は別ですが毎日毎日があぶら汗の流れる一年はやはり苦しかったですよ。
　しかし私は人間に不可能はないと信じて生きてきました。必要な事は時間と忍耐であると信じて生きてまいりました。今は白人達がすっかり僕を信用してくれ何をするのにも事欠くことありません。その点本当にありがたい事と思っています。
　あと三ヶ月と思って私も頑張っております。それは毎日が大変な事でありますが近頃は何があっても淡々とした生き方をしております。時間が一切を解決してくれると信じております。

☆一九六九年一月十四日
……よくもやってこれたものと一人で感心をする事ありますが……
　人間にはまず不可能な事ありませんネ。

ただ大切な事は時間かとも思っております。死ぬまで修行をする事ですね。いや死んだあとまでも修行をする事ですね。そんな事を感じています。

結局は淡々とした生活をしてゆく事ではないかと自分にいいきかせております。

読書は必要ですね。

私もいろいろの事よく解りませんが一歩一歩ですよ。

あせったり驚いたりする事ありませんよ。

それぞれの生き方があるのですからそれぞれの生き方をすればそれで良いのではないかと思っています。

（中略）

昨日の正午から今朝までふた月ぶりに雨が降りました。何か心の「垢」があらわれたような感じがいたしました。雨の日は何か少し暗い感じがいたしますが――私は好きです。

先代方丈様直筆の書簡

五世紀菩薩像
中國敦煌千佛洞

■『生きる力』　令和二年お盆発行（通巻四十三号）より

「人を思いやる心」

善光寺住職　黒田博志

新型コロナウイルス感染症の流行により、四月の初めに緊急事態宣言が出されました。不要不急の外出自粛要請により、多くの方が不安を抱え自宅にて過ごされたことと思います。その不安な気持ちからか、普段では考えられない行動を起こしてしまったという報道を耳にしました。

特に私が気になったのは、スーパーでの買い占めや家庭内暴力や子供への虐待、医療従事者の家族に対する差別などさまざまなものでした。「なんでこんなひどいことをするのだろう？」と思いました。

ある日、マスクや消毒液を必死になって買い占めようと何軒もお店を探している自分がいました。なんとか手に入れることが出来、ひと安心。その時、私はハッとしました。今の自分の行いは、自分のことしか考えていなかったなと……。その自分を恥じながら、はたしてこの状況下で自分は自己中心的な振る舞いや差別の心を起こさずに行動することができるのだろうかと改めて考えさせられました。多くの方が生活スタイルの変更を余儀なくされ、慣れない生活

のストレスと、今後どうなってしまうのかという不安が重なり、さまざまな問題が起こってしまいました。

新型コロナウイルス感染拡大の件で、曹洞宗宗務総長が「『自未得度先度他』の心に学び、『四摂法』に従って、冷静に行動しましょう」

住職と共にご挨拶に立つ熊谷筆頭総代

と談話を発表されました。

「自未得度先度他」の心とは、自分が仏果を得て救われる前に、まず他の人びとが救われるようにするということです。この状況の中、どのように実践すればよいのでしょうか。

「自未得度先度他」の心と聞くと、私はひとりの檀家さんを思い出します。お寺の筆頭総代の熊谷さんです。

総代とは檀家さんのまとめ役、その筆頭ですので更にまとめ役ということです。実は今年三月に百四歳でお亡くなりになられました。五十年間お寺に尽くして尽くして尽くしぬいてくださったお方です。

当寺は昭和四十四年開創、今年五十一年目となります。総代として昭和四十六年よりお勤めいただき、寺の草創期からお支えいただきました。百歳を超えた頃から「最近歳を感じるな。やっぱり歳かなぁ」とか「最近身体が思うよう

に動かなくなってきたなぁ」とか「そろそろ総代を引退してほかの方に譲らないとなぁ」とにこやかにお話しされていたことを思い出します。

私や他の総代から「筆頭さんがいなくなったらお寺はどうなるのですか？」とお願いをして最後まで現役を貫いていただきました。行事では必ずご挨拶していただきました。晩年は酸素吸入の器具を引きずりながらお寺にお越しいただいていました。しかし、行事の際は、その器具を控室に置かれ、本堂まで杖も使わずに一歩一歩確認するように進まれ、行事の最後のご挨拶では年齢を感じさせない張りのあるお声でお話ししてくださいました。

ご参詣の檀家さんは総代さまの壇上のお姿を見ただけで拍手喝采でした。ものすごいパワーでした。その後は皆さんが総代さまの周りにあつまり、握手をしたり、身体中に触れたりとその様子はまるで「なでぼとけ様」にご利益をいただこうとお参りしているようでした。

控室に戻ると呼吸を乱してソファーに座り込む総代さま。かなりご無理をなされていると感じました。お彼岸やお盆の法要は午前と午後の二回行っています。両方の法要でご挨拶していただいているのですが、お辛そうなお姿を見た私は「お疲れのご様子ですので、午後の部はお休みください」と言いました。すると総代さまは「大丈夫、午後も出させてもらいます。それが私の務めだから」とおっしゃいました。明らかにご無理をなさっているのはご様子からわかりましたが、「承知いたしました。よろしくお願い致します。参詣の皆さまも総代さまのお姿を見れば喜ばれます。」「そうか。それはありがたいな。私も皆さんと同じだよ。皆さんにお会いするのが私の喜びなのだよ」と。その時のお姿お声は今でも鮮明に覚えております。

常にご自分のお身体のことよりもお寺のこと、

檀家さんのことを思い、出来ることをいつも精一杯尽くしてくださった総代さま。まさしく「自未得度先度他」のお方でした。私はそんな総代さまの生きざまを私の中にすべて納めてこれから共に生きていきたいと思います。

和尚である私も、今そのような生き方をしなければならないと感じております。このような大変な状況下、総代さまだったらどうされるのか考えます。

このようなときだから？　自分や家族のことだけしか考えられないということに陥ってしまいがちです。しかし、少し視野を広くして周りの人たちのことを気にかけるゆとりを持ちたいものです。外出自粛というのは私自身予想以上に辛いものでした。でも今、私に出来ることは風評被害や差別を起こすことのないように努め、すべてのものを平等に見る眼をしっかり持つことです。また、基本的な行動としては、新型コロナウイルス感染症について正しく知り、知らず知らずのうちに罹患し、他の方に感染させてしまうことのないように行いを慎むこと。手洗いうがいなど感染防止対策を徹底することにより、自分の感染を防ぎ、周りにいる方々の感染をも防ぐことになります。

それでも、もし感染してしまったときには、その事実をあるがまま受け入れて、医療従事者をはじめとする支えてくださる方々に対して、感謝の気持ちを忘れることなく治療に専念していこうと思います。

疲弊しているこの世の中において、総代さまのように「自未得度先度他」の心をもって行動してくださることを切に願っております。

（『生きる力』神奈川県第二宗務所第五教区出版委員会発行）

〈連載〉

『普勧坐禅儀』に学ぶ　その十四

駒沢女子大学学長　安藤嘉則

〈本文　書き下ろし文〉

若し坐より起たば、徐々として身を動かし、安祥として起つべし。卒暴なるべからず。

〈現代語訳〉

もし坐禅を終えて立つのであれば、徐々に上体を動かし、ゆったりと落ち着いて立ち上がります。にわかに荒々しくしてはいけません。

坐禅を終えるときの心得がしめされています。『普勧坐禅儀』ではこの一段をもって坐禅の作法の説明が終わりますので、ここまでをお経でいう正宗分（本論）として位置づける解説もあります。

曹洞宗では各専門道場や坐禅会などにおいて坐禅開始の合図として、三回鐘が鳴らされ（これを止静鐘といいます）、だいたい四十分から四十五分を一炷、すなわち一回の坐禅として坐ります。一炷というのは一本の線香が燃え尽きる時間とされています。そして坐禅の終了の合

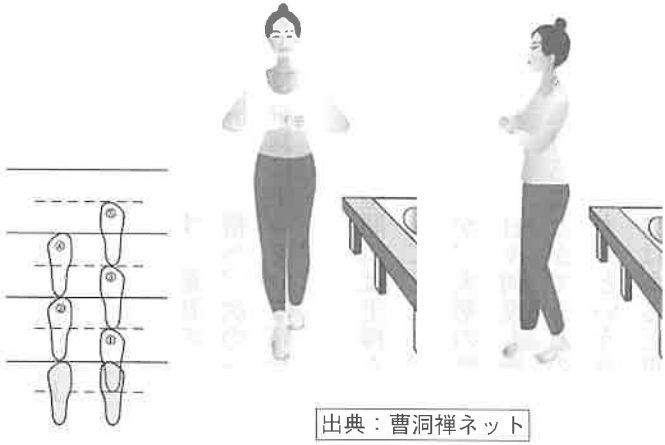
図の鐘（放禅鐘）が一回鳴されると、まず合掌し低頭（頭を下げる）し、上体を左右に振り子のように揺らし（左右揺振）、組んでいる足を静かに解いていきます。

それから身体を右まわりに回って単（坐禅する場）を降り、坐蒲の形を整えてから単に向かって合掌一礼、振り返って反対側へも合掌一礼をして退堂していきます。最初の一礼は隣位問訊といって両隣の修行僧へ、次の一礼は対坐問訊といって反対側に坐っている修行僧への挨拶です。

この隣位問訊と対座問訊は坐禅を始める際も行われ、一回一回の坐禅ごとに必ず行われます。坐禅は各人の修行ですが、大勢の修行僧たちと一緒に励むからこそ、日々何度も繰り返して行う坐禅修行を続けることができるのです。僧堂ではよく「大衆の偉神力」という言葉を聞きますが、確かにそういう力はあると思います。お寺にいて坐禅する環境が整っていたとしても、たった一人でいたならばなかなかこうした坐禅修行は続けることはできません。ともに励む仲間の修行僧の存在は大きいのです。そうした思いがこの二つの問訊（合掌一礼）に込められているのです。

ところで坐禅を終える合図の鐘が一回ではなく、二回鳴らされる場合があります。これは経行鐘といい、坐禅に続いて経行という歩行禅（歩く坐禅）をする合図です。この経行では、手を胸のところで交差させる叉手をし、堂内をゆっくり歩んでいきます。そのスピードは一息半歩といい、一回の呼吸するごとに、半歩を進めます。この場合の半歩とは、足の甲の長さの半分だけ前進することなので、大変ゆっくりとした歩みとなります。

またこの経行のときの呼吸や視線は坐禅中と同じです。



出典：曹洞禅ネット

目は半眼（まぶたを半分閉じる）とし前方斜め四十五度に落とし、丹田を中心とした深い呼吸です。しばらく堂内を緩歩し時間になると鐘が一回鳴らされます（抽解鐘）。するとその場で両足を揃えて止まり、叉手のまま低頭して、自ら坐っていた単に戻っていきます。そして再び作法にしたがって次の坐禅に入っていきます。経行というのは坐禅と坐禅の間に挟まれる歩行禅であり、足の痛みや眠気などをとるのにも効果的です。

『普勧坐禅儀』では、この坐禅終了をはじめ、坐禅の所作・心得について簡潔に示されていますが、こうした道元禅師の基本精神に基づいて、その後坐禅の細かな所作の伝統が築き上げられ、現在も修行僧たちは沈黙の中で最後までゆるがせにせず毎回毎回の坐禅を行っています。

ところで、こうした最後までゆるがせにしないという姿勢は日本の伝統文化にもみることができます。武道ではいわゆる残心ということが強調されています。これは、最後の最後まで心が途切れることなく注意を払うことを意味します。

たとえば弓道では射法八節という弓を射る八つの型がありますが、その最後の八番目が「残心」です。これは一連の動作を経て、矢を放ちますが、放った後も、心身ともに姿勢をくずさず、気合いのこもったまま、視線は放たれた矢の着点を見据えることです。弓道ではこの残心が大切であるとされています。

また剣道や長刀において、たとえ一本をとったとしても、気を緩めず相手の反撃を対応できる身構えをくずさないことを残心とし、この残心がないと試合で技が決まっても有効とされません。たとえば、一本を取ってガッツポーズなど、歓喜のあまりはしゃいだりすると、残心がないとみなされ、一本が取り消しになることがあります。これは弓道でも同じように的中が取り消しになることがあります。

しかし一方において、私たちがふだんテレビで楽しむスポーツはいかがでしょうか？　サッカーや野球、格闘技など、ゴールを決めたり、ホームランで勝利したり、対戦相手をＫＯしたときには、ガッツポーズをはじめ、喜びの感情をそのまま体で表現しています。ある意味で日本の伝統的な武道と現在のスポーツ競技とは、その最後のシーンにおいて対照的です。

かつて大相撲において横綱朝青龍が白鳳との優勝決定戦で勝ったとき、思わずガッツポーズをとったことで、横綱審議委員会で問題となり、マスコミでも取り上げられたことがあります。ちょうどそのとき私は大学でモンゴル人の院生を二人指導していたので、このことを話題にして話し合いました。するとモンゴルの院生たちは、モンゴル相撲などを小さい頃から見てきたこともあり、大切な一番に勝利したことを素直に身体で表現する方が人として自然ではないか、日本の感情を押し殺す文化に疑問を覚える、といった意見でした。確かに日本人でも現代のス

ポーツでは喜びを素直に表現することは当たり前になっています。しかしなぜ日本の伝統的な武道などではこのような残心の伝統があるのでしょうか。

日本の伝統的な残心の文化には、深い意味があると思いますが、一つには、自らの勝利は相手があってこその栄誉であり、勝利に驕らず、対戦相手への敬意、感謝の念が、この残心の根底にあります。このことで思い出されるのが、スポーツ新聞で巨人軍の担当記者が、前人未踏の八百六十八本のホームランを打った王貞治選手を回想した記事です。細かな内容は忘れましたが、そのスポーツ紙の記者は、王貞治選手がホームランを打っても直接喜びを表すこともなく、いつも淡々とベースを回っていたことに対してなぜもっと歓びの感情を出さないのかと聞いたそうです。すると王選手は高校時代、甲子園での試合でホームランを打ったとき、そのうれしさを爆発的に表したところ、お父さんから「打たれたピッチャーの気持ちを思え」と激しく叱られたからと答えたそうです。そんな内容の記事でした。王選手が自らのホームランで喜びの感情を表したのは、八百五十六本目で世界記録を抜いたときに万歳をしたときの一度だけだそうです。いずれにしても、王選手が高校時代に受けた父の教えを生涯にわたって大切に守っていたことに心打たれました。私はこれも野球における「残心」の一つのかたちではないかと思います。

ところでこうした武道の世界だけでなく、茶道などの芸道でも「残心」ということがいわれます。たとえば桜田門外の変で知られる井伊直弼は、一流の茶人として知られており、茶道の心得を示した「茶湯一会集」を著しています。この書物において直弼は大変有名な「一期一会」という言葉を残しています。また、この書には

「余情残心」という言葉がみえます。これは茶をもてなした客人を見えなくなるまで、ずっと見送り、その後、主人は茶室に戻り、茶をたてるのです。そして、客人と過ごしたひとときが一生に一度の出会い（一期一会）であったことを思い、その余韻を茶とともに味わいます。まさにかけがえない時間を大切に心に刻んでいくのが直弼のいう「余情残心」なのです。

井伊直弼は井伊家菩提寺の彦根清涼寺（曹洞宗）において参禅し、仏洲仙英（清涼寺二十三世　一八六四年寂）の下で印可を受けたといわれるほど、禅を極めた人でした。こうした曹洞禅の精神的背景の中から「一期一会」の心を発揚した「茶湯一会集」が生まれたことは今日改めて知られるべきでありましょう。

かつて私が、或る専門道場にうかがったときのことでした。山門頭で帰りの挨拶をして一〇〇メートル以上も歩いて振り返ったとき、修行僧が当方に向かって合掌しつづけておられました。お寺では大事な客人に門送する倣いがありますが、遠い山門まで合掌を続けておられた雲水さんに思わず合掌で返したことがあります。曹洞宗ではこのような伝統は今も続いているのです。

この井伊直弼をはじめ、千利休や武野紹鷗らの茶人たちも大徳寺の禅僧に参じ、また柳生流の祖、柳生宗矩は沢庵宗彭に参じて、新たな境地を開いています。

今回、『普勧坐禅儀』の坐禅を終える一文を手がかりに残心について述べましたが、こうした禅僧たちと芸道のキーパーソンたちとの結びつきが、日本文化の奥行きを広げ今日に至っているのです。

曹洞宗のご詠歌は、「梅花流詠讃歌」といい、お釈迦様や道元禅師・瑩山禅師のご一生や曹洞宗の教えが歌詞となっています。お唱えをしながら楽しく仏教に触れることができます。善光寺では毎月一回、御詠歌教室を開催しています。講師は、元梅花流特派師範　栃木県高徳寺副住職渡邊清徳師です。

「梅花流詠讃歌（ばいかりゅうえいさんか）の歴史と曲の紹介」

梅花流師範　渡邊清徳
（高徳寺副住職）

今年春からの新型コロナウイルスの世界的な感染の広がりにより、東京オリンピックが延期されただけでなく、私たちを取り巻く環境や生活も一変してしまいました。

これまでの常識が通用しなくなり、新たな生活環境に随時適応しながらの生活は窮屈で、みんなが大きなストレスと苦しみを抱えています。こんな時だからこそ、お寺に集いお互い顔を合わせ、ご供養のまことを一つにしたいところで

すが、残念ながら感染予防のため、本年の善光寺様の法要やイベントは、ほぼ中止となってしまいました。私が毎月担当させていただいている「善光寺御詠歌教室」もしばらくお休みとなっています。

春秋のお彼岸や、施食会法要では、皆様と共に詠讃歌を唱え、法要に花を添えています。お経の内容や意味は、読んだだけでは少しわかりにくいと思いますが、それに比べ詠讃歌は、歌詞に仏教の教えがちりばめられており、平易に理解しやすく、聞いているだけでもそのメロディに心を揺さぶられます。更に声に出してお唱えすると、色々な気持ちがこみ上げてきて、歌い終わった後に心がスッキリするような気がします。

私のお寺では、通夜・葬儀だけでなく、年回法要の時にも詠讃歌をお唱えします。参列者の中には、一緒にお唱えしましょうと促すと、「私

は音痴だから……」等と遠慮される方もいらっしゃいます。しかし詠讃歌は、歌が上手いとか、声が良いとか悪いなどはあまり問題になりません。自ら詠讃歌（み仏の教え）を声に出せば、その歌詞やメロディにいざなわれ、いつの間にか自らの心に「花」が咲くのです。その心の花が「仏心」であり、私たちが一番大切にしなければならないものです。善光寺様の法要でなされている、お経やご法話・詠讃歌は全て、皆さんに気づきを促し、本来備わっている「浄（きよ）らかな心の花」を咲かせるためのものなのです。

そのようなわけで、今年は詠讃歌を一緒に唱える機会がありませんでしたので、今回は曹洞宗の詠讃歌である梅花流詠讃歌の歴史と、いくつかの曲をご紹介したいと思います。

詠讃歌とは、日本に伝わる宗教音楽の一つで、仏教に関わる歌詞を持ち、民謡などに似た節を付して歌われるものです。成り立ちは諸説ありますが、十六世紀頃には存在していたことが確実で、江戸時代には坂東・西国・四国等の霊場では、巡礼歌として広く歌われていました。そのメロディは口伝えで受け継がれていましたが、大正時代に山崎千久松という人物が、それまでばらばらに唱えられていた巡礼歌を収集・編纂し大和講（流）を創設しました。その後、仏教音楽として格式を高めるべく、高野山真言宗の管長に総裁就任を依頼し、在家信者さんたちの仏讃歌として用いられることとなりました。後に高野山真言宗とは決別してしまいますが、高野山真言宗は、独自に金剛流を立ち上げ、真言宗智山派は密厳（みつごん）流、豊山派（豊山流）、浄土宗（吉水（よしみず）流）、臨済宗妙心寺派（花園流）など、その流れは各宗派に広がっていきました。

曹洞宗では、昭和二十七年、道元禅師の七百回大遠忌に向け仏教音楽を取り入れようと、各流派の詠讃歌を公聴し、運営や組織の調査を行

いました。各流派の詠匠により自流の極意が披露されましたが、模範にすべき流派は、行持綿密な作法、唱え方もはげしくもなく低調でもなく、曹洞宗の性格にふさわしいものとして真言宗智山派の密厳流が選定されました。そして、密厳流の先生を招聘し、若手僧侶たちが詠讃歌を学び、梅花流の創立にこぎつけたのです。設立当初、梅花流には曲がありませんでしたので、密厳流から曲を数曲ご提供いただき、新たに歌詞を付け加えて唱えられることとなりました。その後、梅花流独自の曲もできましたが、密厳流から頂いた曲は今も「伝承曲」として唱えられています。

「梅花流」の流名については、正法流・芙蓉流・梅花流といくつかの候補が挙がりましたが、道元禅師の著書『正法眼蔵』「梅花」の巻、瑩山禅師がお示しになられた『伝光録』中の「梅華」という言葉に因み、委員会で決定されました。その後、昭和二十七年一月に第一回梅花流講習会が開催され、以降毎年各地で講習会が行われています。また全国の講員さんの発表会でもある梅花流全国奉詠大会も盛大に開催されています。

そもそも「詠讃歌（えいさんか）」とは、御詠歌（ごえいか）と讃歌（さんか）の総称です。五・七・五・七・七の短歌形式で詠まれたものが御詠歌で、七・五調で綴られた和歌が讃歌であります。讃歌は、お釈迦様やお祖師様方のみ教えや、ご生涯の物語などが語られており、ご詠歌はその心を短歌で表したものです。

梅花流の曲は、いくつかのジャンルに分けられています。仏教徒の根本である帰依三宝を唱える「三宝御和讃」や曹洞宗の経典である『修証義』の内容を示した「修証義御和讃」をはじめ、坐禅の心を詠った「坐禅御詠歌（浄心）」など、やさしく曹洞宗の教えに触れることができます。また、お釈迦様や道元禅師・瑩山禅師

のお誕生や修行の様子、観音様やお地蔵様の菩薩の誓願を示した曲もあります。そして、亡くなった方へのご供養の曲もあります。今回は、その中のいくつかをご紹介致します。

はじめに、皆様も良くご存じだとは思いますが、お釈迦様のお誕生の様子を伝えた御和讃です。

『釈尊花祭御和讃』

(一)三千年昔ルンビニの
花の御園に生れましし
玉のおの子は人の世の
救いの御親となりたもう

お釈迦様の誕生日である四月八日の花まつりの歌です。お釈迦様は、紀元前約五百年頃に、インドの北部にある小さな国の王子として生を享けました。お母さまのマーヤ夫人は、白い象がお腹に入る夢を見てご懐妊されたとのことです。お釈迦様がお生まれになった時の様子は次のように伝えられています。マーヤ夫人が、ルンビニの花園で無憂樹の花に触れようとして右手を上げた時、その右脇からお釈迦様がお生まれになりました。お生まれになるとすぐに、お釈迦様は七歩お歩きになり、右手の指で天を指し、左手の指で地を指しながら「天上天下唯我独尊（私はこの世で最も大切な教えを広めます）」と宣言され、それを聞いた天上界が歓喜の甘い雨を降らせたとのことです。

(二)天にも地にもひとりなる
尊き我に目覚めよと
教え給いし法の花
後の世までも香るなり

「天上天下唯我独尊」の言葉は有名ですが、間違った解釈をされていることがあります。これは、自分という存在は、この世に唯一無二であり、その命はすべて尊いものであるということです。SMAPのヒットソングに「世界に一つだけの花」という曲がありますが、「世界に一つだけの花、一人ひとり違う種を持つ、その花を咲かせることだけに一生懸命になればいい」という歌詞は、この教えからできたといわれています。

㈢心の花も咲き匂う
卯月八日の花まつり
幼姿のみ仏に
甘茶灌ぎて祝わなん

曹洞宗寺院では、三仏忌（四月八日お釈迦様の降誕会・十二月八日の成道会《お悟りの日》・

二月十五日の涅槃会《お命日》を勤めています。花祭りには、誕生仏に甘茶を灌ぐシーンは、皆様も何かの機会に目にされことがあることでしょう。毎年、善光寺御詠歌教室でも三仏忌をお勤めしております。そのようにご縁に合わせた年々の行持をつとめることによって、私たちの信心が芽吹いていくのです。

次に、今年九月に善光寺様に新たに観音堂が建立されましたので、観音様の御和讃に触れてみたいと思います。

『観世音菩薩御和讃』

(一)お慈悲の眼あたたかく
まどかに智慧は満ちわたる
この世の母のおん姿
南無や大悲の観世音

今秋、先代住職黒田武志和尚様の十七回忌に合わせ、善光寺様に観音堂が完成しました。観音様の慈悲の光は、分け隔てなく誰にでも満遍なく注がれますので、「普門」とか「円通」と表されます。普門寺とか円通寺という名前のお寺は、観音様がおわすお寺ということです。観音様のそのやさしい眼差しはあたたかく、まるで慈母のようにやさしく包み込んでくれると詠っています。

(二)心の闇はくらくして
迷いはまこと深けれど
深きがゆえのおん誓い
南無や大悲の観世音

私達は日々の暮らしの中で、悩んだり不安を感じたりしています。今年はコロナ禍で多くの人が口に出せない苦しみを抱いています。「観

世音」とは、そんな世の中を「観察」し、衆生の「声なき声（音）」を聴きつけるのです。そして、その気持ちに寄り添い、悟りの世界に導くお手伝いをするという意味です。私たちは迷いの中で生きているからこそ、どう生きるべきかという答えを探し求めています。その答えを現実的な事象の解決だけでなく、信仰の中で心のゆたかさとして導き出すこともできるのではないでしょうか。どうぞ善光寺の観音堂にお参り頂き、掌を合わせ心から「南無大悲観世音」と念じてみてください。

㈢めぐみのなかにつつまれて

うれしさあまるおきふしに
何をばおもいわずらわん
南無や大悲の観世音

観音様の慈悲の中で生かされているという感覚に満たされたとき、思い煩うことすらも苦ではなく、安心して生きていくことができます。また、自らが観音様のように、多くの人に慈悲を手向けていくことが、自らの安心に到るきっかけとなるのです。

最後にご供養の御詠歌を紹介します。先述の通り、御詠歌は和讃と違い、短歌形式でその気持ち（本当の意味）を詠んでいます。

『追善供養御詠歌（妙鐘）』

うちならす鐘のひびきはそのままに
三世の仏のみ声なるらん

私が指導させていただいている梅花講員さんの旦那様が、突然お亡くなりになりました。奥様は、悲しみのあまり、しばらくお稽古を休まれていましたが、ある時お元気な姿で顔を出されました。お稽古が終わり、みんなでお茶をし

ている時、その奥様が突然話し出しました。「先生、私お父さんの供養の為に、毎日お仏壇の前で御詠歌を唱えていたんです。最初は悲しくて悲しくて仕方がなかったのだけど、ある時『いつまでもメソメソしていてお前らしくないぞ！』って、お父さんの声が聞こえて……それで、いつまでも悲しんでいたらいけないと思って、今日出向いて来たんです」と言われました。

「打ち鳴らす鐘の響きはそのままに三世の仏のみ声なるらん」奥様が、旦那様の為に一心に御詠歌を唱えながら鳴らしていた鈴・鉦の音は、そのままみ仏からの「諸行無常」を知らせる声だったのでしょう。

私たちは、常に移ろい変わる世に身を寄せているということを理解しているつもりですが、いざ目の前に予想もしない現象が起こった時、戸惑い、受け入れるのに少し時間がかかることがあります。

しかし、亡くなった大切な方に対して、本当に感謝の気持ちを捧げようとするならば、これから自分の命をどう働かせていくかということも学んでいかねばならないのです。奥様は、自ら鳴らしている鐘の音でそのことに気づいたのでしょう。

追善供養は、「善を追う」と書きます。亡き人から受けて嬉しかった善行を、今度は残された私たちが多くの人に振り向けていくことです。それによって、亡き人の姿は見えなくなっても、その方の思いや願いは引き継がれていくのです。それが本当の追善供養なのです。

ここまで梅花流詠讃歌の歴史と曲の紹介をしてきましたが、梅花流には八十を超える曲がありますので、時間の都合上またの機会にご紹介したいと思います。できますれば、次回は皆様と共に詠讃歌を唱えながら、その歌詞に親しめれば、更なる法悦に結び付くことができるので

はないかと存じます。どうか、それまで皆様ご自愛頂き、お元気でお過ごしいただきますことをご祈念申し上げております。

合掌

梅花流詠讃歌は曹洞宗のホームページで試聴できます。
また洋楽譜もダウンロードできます。

■法話

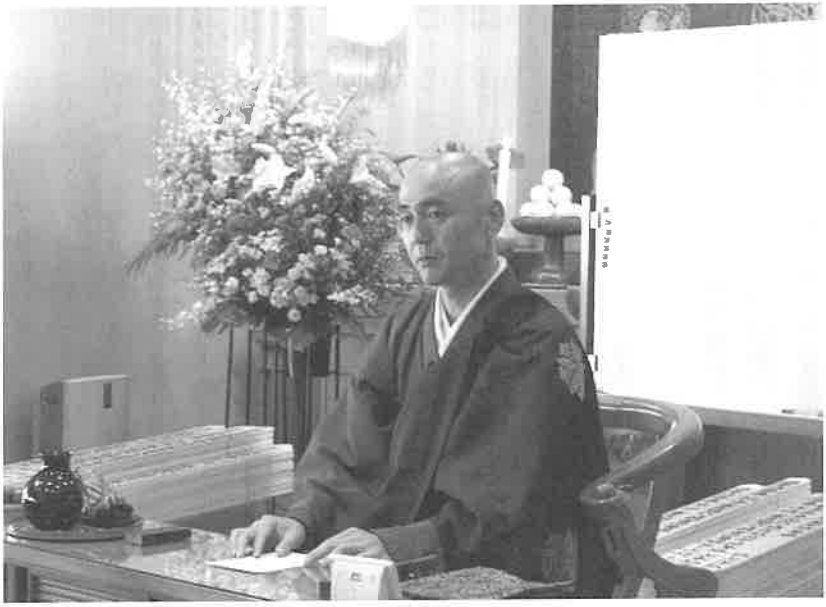
「観音さまは どこ」

山梨県甲府市　長泉寺住職　水庭浩章

鎌倉街道から日野公園墓地への緩やかな坂道を進むと、左手に大きな石碑が目に飛び込んできます。「善光寺参道」。そう、ここは国内外への仏教布教の拠点、横浜善光寺の参道です。その石碑を過ぎて少し進むと、いつもなら善光寺の釈迦殿が見えてくるのですが、その前に存在感のある新しい大きな建物が……、善光寺釈迦殿同様、独特な丸みのある銅葺きの屋根、その堂内には、金色に輝く聖観世音菩薩立像が慈しみの表情で迎えてくださいます。

令和二年九月、善光寺の新たな信仰の場として、観音堂が建立されました。観音さまは人々の声を聴き、救済させる菩薩さまとされています。そのお姿は前のめりで、いつでも直ぐに救済に駆け付ける、慈悲心を体全体で表しています。

元々は如来（正法明如来）で、衆生済度のために菩薩のお姿になられて世の中に出られたとされています。また、衆生済度のほうからいうと「観世音菩薩」といい、自己の修行のほうからいうと「観自在菩薩」といいます。『般若心経』の冒頭にでてくる菩薩さまですが、同じ



菩薩さまのことをいっています。

さて、私たち曹洞宗侶が観音さまといって真っ先に思い浮かべるのが、大本山永平寺御開山、道元禅師さまがお示しくださいました『正法眼蔵　観音の巻』です。観音の巻には、ある中国の二人の禅僧のやり取りが書かれています。

その二人とは、雲巖曇晟（うんがんどんじょう）和尚と道吾円智（どうごえんち）和尚の兄弟弟子で、ある日、観音さまについて論議を交わしていました。

雲巖和尚さまが、「観音さまは、そこばくの手眼をもちいてなにをするというのだ」（大悲菩薩〈観音さまのこと〉、用許多手眼作麼）とおっしゃいました。すると、道吾和尚さまが「人の真夜中に後ろ手で枕を探るようなものだ」（如人夜間背手探枕子）とお答えになられました。

雲巖さまのお言葉は、一見、道吾和尚さまに質問を投げかけているようにみえますがそうではありません。観音さまをいいぬいているお言

葉です。「許多（そこばく）の手眼をもちいて」とは、数に限定されないということです。十一面とか、三十三身とか、千手千眼とか、八万四千とか、そのような限定された数の話ではありません。ありとあらゆるものが観音さまの手であり、ありとあらゆるものが観音さまの眼であるということです。

それに対して、道吾さまは「如人夜間背手探枕子」とおっしゃいました。これも、雲巌さまに対抗してお答えになられたのではありません。同じように観音さまを言いぬいておられます。

夜間は真っ暗闇ですから何も見えません。目的の枕も見えない。ですから、後ろ手で枕を探るのですが一向に見つかりません。その枕が「観音さま」です。

ところが、雲巌さまのお示しにあるように、ありとあらゆるものが、自分自身も含めて観音さまですから、他に観音さまを探しようがありません。

このお二人の「観音」論議は、その後も続きます。さまざまな表現を使って違うことを言っているようにみえても、全く同じことをいっています。優劣をつけることはできません。

道元禅師さまも、「比量の論にあらず」と比較できるものではないとおっしゃっておられます。

このお話から、観音さまはどこにいらっしゃるかということがわかります。「観音さまは釈尊の慈悲心をあらわしたもので実在の人ではない」といわれていますが、そんなことはありませんね。この世のありとあらゆるものが観音さまで、そうでないものはありません。

森羅万象一切合切が観音さまの手であり、観音さまの眼であり、観音さまの口です。そのひとつひとつが、観音さまの行いであり、まなざしであり、おこえである。すべてが観音さまの

慈悲心であるということです。当然、私たち自身も観音さまです。そう思えないような人も、観音さまが発心せずにそこにいるというだけのことです。その自らの観音さまを自覚して行いを修めていくことが大切です。それが、「観自在菩薩」です。

さて、そこで問題になるのが、自分自身が観音さまの行いをしているのかどうかということです。

私事ですが、今年の八月末に手術をしました。その手術とは、原因不明の震えの病気、「本態性振戦」の治療として、震えを起こす脳の一部に超音波の熱を集中させて焼くという「集束超音波治療」です。

私は、二十代前半にこの病気の症状が出始めました。特に疲れが溜まっているときに症状が出やすく、処方された薬を服用しながら震えを抑えていました。しかし、加齢とともに症状が頻繁に出るようになり、薬の効果も徐々に薄れてきていました。

そんな時に、病院の先生からこの治療を勧められました。最先端医療で治験数が少なく、更に脳の手術ですから不安も大きかったのですが、治したいという思いと、自分の症例が後の人の役に立てばという思いで手術を受けることに決めました。

手術が無事終わり、症状は劇的に改善しましたが、術前に説明を受けていた後遺症が出てきました。

術後、一時的にふらつきや言語障害の症状が出るが、ほとんどの場合、一から三か月程度で改善されるというものでした。私の場合、その二つの症状以外に、手が思うように動かないという症状もありました。

退院して三日目のこと、ふらつきを感じなが

らも普通に日常生活をおくっていた私は、棚の高いところにある物を取ろうとしました。その時に、棚に置いてあるものが崩れ落ちてきました。それを支えようとした瞬間、体のバランスを崩し、何とか立て直そうとしたのですが体が思うように動かず、左足の小指のうえを、体重のかかった右足の踵で踏んでしまい、あまりの激痛にその場でうずくまりました。

病院で診てもらうと、左足小指の亀裂骨折と診断されました。

それから三日後、包丁を扱っていた時のことです。左腕が思うように動かず、右手の親指部分をかなり深く切ってしまいました。

手は痛い、足は痛い、体は思うように動かない。剃刀がうまく使えなかったり、少しの段差で躓いたり、まっすぐに歩いているつもりが壁にぶつかったり、自分の体が自分の体のように思えませんでした。後遺症のことは聞いてはいましたが、想像以上でした。

思うようにならない体にストレスを感じ、こんなことなら手術をするんじゃなかったと思うときもありました。

自分の体が思うようにならない苛立ち……、そういえば私自身、お説教の時によくそのようなお話をしていました。お釈迦さまが成道後、最初のお説法でお説きになられた「四苦八苦」のなかに、「老苦（ろうく）」と「病苦（びょうく）」があります。年老いて、或いは、病によって自分の体が思うようにならない、思うように動けない苦しみということです。

私は、その苦しみを知ったつもりでお話ししていましたが、実際にはわかっていませんでした。自分の思うようにならない体で過ごすことがどれだけ苦痛なのか、私は今回、自らの体で体験し、少しわかったような気がいたします。

十人十色といわれるように、人の感性はそれ

ぞれです。同じ事で自分はたいしたことがないと思っても、それを苦痛と感じる人もいる。自分の感受性だけで判断することが如何に危険なことなのか、改めて感じました。

いま、コロナ禍において、私たちひとりひとりにそのことが問われています。この新種のウイルスに世界中の人々が翻弄されています。

この状況で危惧されること、それは「差別」と「偏見」です。

現代に生きる私たちが、これまでに経験したことのない事態ですから、皆この感染症を我がことと捉え、感染に対する恐怖を身近に感じていると思います。未知のウイルスのことを思うと不安になり、自己防衛に対する意識が強くなって、他者に優しさを差し伸べる意識が薄れているように感じます。

そのことが、歪んだ正義感になって表れてい

るところもあると思います。「自粛警察」というものがその最たるものでしょう。

ＳＮＳによる、まるで犯人捜しのような感染者の特定、誰しもが感染する可能性があるのに、感染者が「悪」とされてしまう偏見、それ故に、感染された著名人方が「お詫び申し上げます」と、感染して苦しいはずの本人が謝罪することに、とても違和感を覚えます。これは、感染者に対する人権侵害ともいえるでしょう。

このこと以外にも、感染者に関わる医療従事者に対する差別、職業に対する差別、地域に対する差別が罷り通る、そのようなことを目にすると心が痛むと同時に、非常事態時における人間のゆとりのなさを感じます。

しかし、よくよく考えてみると、確かに、中には軽率な行動によって感染してしまった人もいると思いますが、誰しもが感染したくて感染しているのではないのです。そのことを、歪んだ価値観でみるのではなく、正しい眼をもってみることが大切です。

その「正しい眼」が、観音さまの「眼」に他なりません。慈しみのまなざしです。

今般のコロナ禍で、自分自身の、或いは家族の身を守ることを最優先に考えた方も多いと思います。その考えが間違っているのではありません。ただ、それ故に、自分の価値観を、他人に押し付けていることはないでしょうか、価値観の合わない人を、様々な手段で攻撃していることはないでしょうか。

何度も申し上げているように、感じ方は人それぞれです。ひとりでは生きてゆけない世の中において、自分の価値観を押し通すことが如何に無意味なものなのか、よくよく考えればわかることです。

私自身、今回の病気で気づかされました。人の気持ちに寄り添うということは、自分の価値

観を出すことなく、その人の価値観に合わせる努力をすることに他なりません。そのことを気づかせてくれた今回の病気は、間違いなく「観音さまの手眼」であるといえるでしょう。

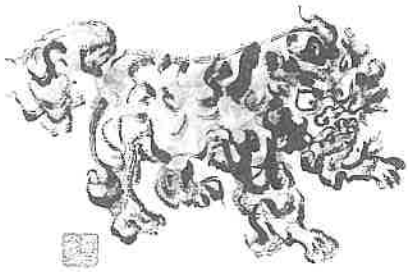
観音さまのお像は、私たちを映し出す鏡といえます。また、この世を映し出す鏡ともいえるでしょう。観音さまを自分の外側にみるのではなく内側にみる、この世の中を外側にみるのではなく内側にみる。

あらゆるものが観音さまであり、休むことなく、手は行い抜き、眼は見抜き。口は説き抜いています。あとは、それを感じる側の問題です。

つまり、自分自身が観音さまであるという自覚をもって、観音さまの行いを、日々修めているのかどうか、人々の迷いや苦しみに自分の価値観を出さずに寄り添うことができているのかどうか。観音さまを内側からみるということはそういうことです。

善光寺住職が法要の度にお唱えされている「世界平和」、それは、仏教徒の大誓願であり、観音さまの願いです。その誓願を形に表したのが、この度完成した観音堂といえるでしょう。

善光寺観音堂が、世界平和と衆生済度を実践する新たな信仰の場として多くの人々をお導きくださる、そのことを切に念じております。



■令和二年九月七日

観音堂　観世音菩薩像　開眼式

かねてより建築中の観音堂に観世音菩薩像をお迎えし、九月七日午後二時より博志住職導師のもと開眼式を執り行いました。

敷地全体の外構工事はまだ完成をしていませんが、善光寺への入口となる大階段が建設されるなど、景観が大きく変わる中で行われた開眼式には、檀信徒を代表して総代の方々にご参列、ご焼香頂きました。

法要後、観音堂建設委員長の山口義男護持会会長より、コロナ禍の中でも無事に開眼式を迎えられた喜びをお話し頂きました。

続いて、地元を代表して日野石材工業協同組合理事長臼井瑞穂様より「目の前で工事が進むのを見て完成をとても楽しみにしていました。このような素晴らしい観音様をお迎えされて地元としてもとても嬉しく思います。」とご祝辞を頂きました。

また、建設を請負った佐藤薫工務店社長佐藤和彦総代からは土地の購入から観音堂建設に至る経緯の説明を頂き、さらに打ち合わせを重ね、住職の意を汲み、寺の顔として誇れる観音堂を建築すべく工夫した点等のお話を頂きました。

最後に博志住職は、

「観音堂建築は先代住職の誓願でありました。梅嘉庵を建てる時にも観音堂の計画がありましたが、機熟さず叶いませんでした。

今回多くの皆さまのご尽力により観音堂が建ち、観音様をお迎えする事が出来ました。これも檀信徒の皆さま方、地元の皆さま方、ご縁を賜った多くの方々のおかげであります。衷心より篤く感謝申し上げます。

今のようなコロナ禍の中においてお迎えすることが出来たこの観世音菩薩様は必ずや、たくさんの人々をお救い下さる仏さまであると、今お参りをしていて確信致しました。お参りされる皆さまを救い導いてくれるだけでなく、世界中の人々に安心を届けられる仏さまだと確信しております」

と力強い言葉でご祝辞を述べられました。

この『成寿』がお手元に届く頃にはお参り頂けることと存じます。どうぞお参り頂き、ご縁を結ばれますようお待ち申し上げます。

（中グラフに続く）

■観音堂

観音堂は釈迦殿と統一感のある銅葺き屋根の外観。内装も釈迦殿と同様の格天井造り。シャンデリアで照らされる観音像の背面にはやはり釈迦殿と同じく、甎仏（瓦焼きの仏様のレリーフ）が施されております。

建物に入らなくても正面からお参りできるように吹き抜けのホールに高さ三メートルを超える観音様をご安置しております。

甎　仏

額は清水寺　貫主　森清範大僧正による揮毫

聖僧様の左右の簾は本寺光真寺
黒田泰弘老師による揮毫

■令和二年二月七日

■開山忌
■善光寺留学僧育英会辞令交付式

善光寺開山忌並びに第三十三回育英会辞令交付式が令和二年二月七日、午後二時より、釈迦殿で執り行われ、関係のご寺院、総代はじめ檀信徒の方々が多数参列されました。

開山忌法要は、焼香師に西有寺専門僧堂堂長・小田原成願寺住職山口晴通老師をお迎えして営まれ、開山楳庵白純大和尚、二世中興大圓武志大和尚のご遺徳を偲んで参列者一同が焼香し追善の誠を捧げました。

左より久松師、住職、余氏、陳氏

続いて育英会辞令交付式は黒田博志理事長の導師により行われました。

今年度育英生に採用されたのは久松彰彦師（曹洞宗総合研究センター教化研修部門研修生）、中国出身の余新星氏（東京大学大学院博士課程）、台湾出身の陳怡安氏（駒澤大学大学院博士課程）の三名。

久松師はアメリカ、余氏と陳氏はそれぞれ東京大学と駒沢大学にて仏教学研究に励まれます。

開山忌焼香師をお務め頂いた山口晴通老師は「先代さまから現住方丈さまが継がれている尊い育英会。その志を育英生に選ばれた皆さまはお心に刻み込んで頑張って頂きたい」と述べ、留学僧の活躍を祈念されました。

（55ページに続く）

（中グラフからの続き）

辞令交付に先立ち駒沢女子大学学長安藤嘉則老師より選考過程報告が行われ「一ヵ寺でこれほどの留学僧を送り出している寺院は他にはありません。今回も学識と意欲ある新たな育英生を迎えることができました」と述べられました。

黒田理事長からこの育英会は、先代住職が若い頃に海外で得た仏縁が人間形成の土台になったとの思いから善光寺開創十五周年を機に仏教の振興、世界平和に寄与できる人材育成を目的に創設した報恩行であること。そして、その原資が檀信徒からの毎食一口の食事を減らして捻出した寄付であることなどを紹介し、最後に「多くの檀信徒や和尚さま方がこの育英会に力を注いでくださっております。その思いをくみ取っていただき、研鑽をしていただきたい。私も共に精進して参りますので一緒に精進しましょう」と祝辞を述べられました。

久松師は大本山永平寺での修行時代に外国人参禅者を案内した際、アメリカで禅を広めた鈴木俊隆老師の著作を読み啓発され、今後は鈴木老師が設立したサンフランシスコ禅センターなどで修行を続けられます。

余氏は北京の清華大学大学院を卒業後、日本の大手自動車メーカーでの勤務を経て、現在は東京大学大学院で夢窓疎石など中世の禅僧や親鸞聖人の研究を続けられています。

陳氏は、国際仏教学大学院大学で『華厳経』の研究を行っており、今後は駒澤大学大学院博士課程で研究を続けられます。

懇親の席では、昨年度育英生の浅摩泰真師が米国タサハラ禅マウンテンセンターでの修行を終えての帰国報告を行いました。

三ヶ月の秋安居で三十五人の在家者や出家得度者と一緒に修行。坐禅三昧の日々を送り、「米

国の方々は熱心で、日常生活に仏教を生かし、仏教を楽しんでいる人が多かった。雑談の時も仏教の話ばかりで充実した修行生活が送れました」と感謝の報告。

また、新型コロナウイルスが流行の兆しを見せ始める中、中国武漢出身の余氏は「日本ではあまり報道されていませんが、日本政府が在留邦人帰国の為に中国武漢にチャーター機を派遣した際、救援物資を中国に寄付してくれています。武漢と姉妹都市の大分市もマスクや防護服、衣料品を送ってくれました」と感謝の言葉を述べられました。

そしてその救援物資に「山川異域　風月同天」の文字が貼られ、それを知った中国の人々が感動しているというエピソードを披露しました。この文字は奈良時代長屋王が鑑真和上を日本に招請するため、千枚の袈裟を送り、その袈裟に刺繍されていた漢詩

山川異域　風月同天
寄諸仏子　共結来縁

の一部。鑑真和上はこの漢詩に感銘を受け日本行きを決断したと伝えられる。

余氏は「日本が全力で援助して下さっていることに中国の人々は本当に感謝しています。政治的な問題は別として民間のレベルではとても親しく交流がなされています。私も仏教徒としてこの育英会をはじめ日本で学んだ素晴らしい事を今後中国に戻った時にもまわりの人に伝えていきたい」と語られました。

先代方丈黒田武志老師が発願し発刊された『成寿』も五十巻を数えます。檀信徒の皆さまに親しみを込め、分かり易く仏教を説き続けた先代方丈さまのお心を今一度追慕し『成寿』に掲載されたお話を再録させて頂きます。

「一年先を見る者は花を育てる。十年先を見る者は木を育てる。百年先を見る者は人を育てる。」……百年先を見据え育英会を設立したそのお心に触れたいと思います。

留学生交流を支えて

黒田武志

なぜ留学僧育英会をつくったか

誓願

いまから十一年前といえば、私が住職を務めている横浜善光寺が、ちょうど開創十五周年を迎えた年です。ゼロから出発した私が、寺を持ち、発展させることができましたのも、みほとけのお導きと心温かい多くの方々の力添えのおかげ――これをひとつの節目としてなんとかみなさんにご恩返しができないものかと考えてお

りました。その具体化が、人を育てることだったのです。海外に留学僧を派遣して人材の育成を図り、仏教の振興、世界の平和にいささかなりとも貢献したいと。

一寺の住職がこのような大誓願を立てましたが、「そんなことできるわけがない」と思われた方も少なくなかったのではないかと思います。でも私はなにごとも信念を持って行えば、かならず実現できると信じて生きてまいりました。このように思えるようになったのも、若き日の貴重な体験の数々があったからではないかと思います。

修行の始まり

そのとき私は、逆方向の急行列車に乗っていたことに気づきました。まさかこの手違いが、甘えた私の心を叩きなおすために、ほとけさまが与えてくださった修行の第一歩となろうとは、思いもよらぬことでした。

僧侶の兄が、開教師としてアメリカに渡ることになったのは、私が高校三年の夏のこと。世界中を歩いていろんなことを見てみたい。そんな夢を抱いて私は、ぜひ連れていってくれと頼みました。

「それならまず仏教を学べ」

それが兄の返事でした。それで私は、僧侶になる決心をして、大学で仏教を学んだのです。大学院もすませ、本山の總持寺に入りました。その後、永平寺に入ったのも、アメリカへ行きたい一心のことでした。

せっかく寺に入っても、そういう我慢修行ですから、ほんとうの修行ではありません。こんなことをしていて、いったい何になるんだろうと、まったくやりきれない気持ちで下積み修行をやっておりました。こんな未熟な心でいたからでしょう。永平寺では体を壊してしまいまし

第一回生（田中智誠師（右）・梅田尚平師（左））をタイ・ワットパクナムに激励に行く黒田理事長

た。それで下山して福井駅から東京に帰るつもりで、列車に乗ったという次第なのです。

列車が逆方向と気づいても、いまさら引き返すこともできず（お金を持っていませんでした）、私は富山まで行きました。そこには学生時代の友人がおりました。彼の勧めで托鉢をしてみると、たちまちたくさんの喜捨が集まるではないですか。

これなら手持ちがなくとも悠々と行脚ができる。よし、全国を回ってみようという気になり、私の托鉢行脚が始まったのです。いまから思えば当然のことながら、世の中よいことばかりでないことを、この長い行脚で思い知らされることになりました。

生かされていることに気づく

北陸、山陰、九州と回り、それから山陽を通って年も暮れ近く、私は京都に来ていました。雨が何日も続いていました。宿を求めて、お寺の門を叩いてまわりましたが、法衣はボロボロ、草鞋履きの足はドロドロ、馬糞のような臭いを立ちのぼらせている私に、よい返事は返ってき

ません。駅で眠るには寒すぎる。

やっと一軒の木賃宿を見つけました。そのときの所持金が三百五十円です。宿代が素泊まりで二百五十円。銭湯（宿の主人がお風呂に入るのを嫌がる様子なので、一キロ先まで歩いて行ったのです）が十六円。コッペパンなどを買って宿に戻りました。

朝から何も食べていなかったのです。残ったお金を机の上に並べてみました。二十五円。ため息が出ました。明日の命もわからない、みすぼらしい僧侶。それが私の姿だったのです。

翌朝、雨の中、宿を出て行かねばなりません。おれはいったい何をしているんだろう。みじめさのどん底で、私は雨を眺めてぼんやりとしておりました。

その時です。こんな思いが突如として立ち現れたのです。おれは僧侶じゃないか。自分の生活を心配している場合じゃない。僧侶の役目はまずお経をあげることじゃないか！　簡単なことなんです。しかし、それまでは気づかなかったのです。

霧が晴れるような思いで、私は宿屋のご主人に頼み込み、お経をあげさせてもらいました。お経をかみしめながら唱えていると、ご主人のやさしさがありがたく身にしみてくるのでした。こんな私を追い払わずに泊めてくださったのですから……。

感謝の思いでいっぱいのまま、ザンザン降りの町を、私は大きな声で「般若心経」を唱えて歩きました。門前払いの言葉も、私を磨いてくださる声に聞こえました。

午後を過ぎて雨も上がりかけた頃、女子校の前を通りかかりましたら、ひとりの女学生から十円の喜捨……その十円の尊さ、ありがたさ！

気づくと私は土下座をして感謝を申し上げて

いたのです。すると次々とみなさんがご喜捨してくださいました。

こんな私などに、なんてもったいないこと。感謝で胸が詰まりそうになったその瞬間、太陽の光がサーッと私の目に射し込んできました。

ああ、私は生かされている！

この身はほとけさまにおまかせしていればいいのだ！

一人ひとりの中にほとけさまはいらっしゃる！

……このときの感動をどう表現したらいいものか……。

それからです。状況は同じでも、心の中は豊かでやすらいだ思いで満たされるようになりました。怖いこともうれしいことも超越して、これでいいという心境になることができたのです。

どんな体験も修行である

全国行脚を終え、私は再び總持寺に入りました。自らの意志です。三年間の修行ののち、タイで一年学び、アメリカへ発ったのはそれからです。十八歳のときに夢見たアメリカでしたが、実現したのは三十を過ぎてからでした。

しかしです。もし私が、簡単にアメリカ行きを許されていたら、人の尊さ、ありがたさに気づかぬまま、うわべだけの仏教論を説いていたことでしょう。

私が若い僧侶を見るとき、どうしてもあのころの自分と照らし合わせてしまいます。どんなつらい体験も、みじめな体験も、すべて修行となり、肥やしとなる。

あのときの感動を多くの人々と共に味わいたい。そんな気持ちが、私に「育英会」をつくらせたのです。

（第二十四巻　抜粋）

横浜善光寺留学僧
育英会十五年の歩み

日本は世界最大の仏教国です。しかし遺憾ながら、日本仏教界の現状は、依然として直接収入につながる仏事を司ることが寺院の大きな目的であるかのように受け止めています。

世界の大勢に即応して教化の実をあげる態勢がまだできていないのです。さまざまな宗派に枝分かれした現在の日本では、信仰の対象や教義がそれぞれ異なるために、なかなか各宗派が一丸となって事にあたるのはむずかしい。私たちが忘れてならないことは、現実を踏まえ、過去をかえりみ、未来の方向を見直すことです。

人々の安心・平和・幸福を導く伝導界の改革はおろか、世界が滅びの道を突き進むのを止めることはできません。少しでも、その速度をゆるやかにするために、一人でも多くの人が力を合わせて、礎（いしずえ）を築く必要があります。

私も新寺建立の初心に立ち還り、釈尊の教え――〝真実〟の教えが絶えることなく伝わっていくようにするために、いまこそ、世界的視野に立ち教化できる人材育成こそ急務と観じ、「海外留学僧派遣」という大誓願を立てたのでした。

所謂ひとりの仕事には限りがあります。多くのあらゆる分野・衆知を集めねばなりません。しかし宗務当局や本山ならいざしらず、金も力もない一寺の住職がそのような壮大な大誓願を立てそれを実行することはいささか僭越があります。それだけに心配してくださる方。また、「そんなことができるわけがない」という声も設立当初は囁かれました。

関心をもってくださる方には、ありがたいと思っておりました。でも、これは私が賦与された天の使命。生まれたときから、私の歩むべき

道がありました。私は自分の歩むべき道を一所懸命歩く。私の運命と思い唯ひたすら歩いてきました。何事も信念を持って行えば必ず実を結ぶと信じて歩いてきました。

「法輪転ずるところ食輪転ず」と言われます。私は檀信徒のみなさまに、「毎度の食事ごとにおかず一口分だけ減らしてご協力してください。それで熱意のある若者を留学させたいのです。世界に仏法を広げる人づくりのために。未来の平和のために！」とお願いし一人一仏と続けて参りました。

そして、昭和五十九年一月、東隆眞、黒田俊雄、佐藤俊明、鷲見透玄、中村治雄、奈良康明という各先生方を育英会設立準備委員（後に理事）とし、最高の頭脳と活動力を得て、昭和六十年、記念すべき留学僧第一回生二名をタイのワット・パクナムへ留学させることができたのです。半年後、ワット・パクナムの住職に、「二人は稀にみる熱心さで、模範的な留学僧だ」と称賛され、私のよろこびは計り知れないものがありました。

翌年、アメリカとインド、スリランカへ四名。その翌年は、アメリカ、タイ、インドへ五名、中国から一人受け入れ……第四回、五回、六回と、留学僧の派遣が実現し、立派に成長した留学僧の各方面での活躍は頼もしい限りです。あれから十五年の月日がたち、留学僧は延べ八十八名にのぼりました。日本の若者を海外に派遣するばかりでなく、海外から日本に受け入れる人数も増えて参りました。

育英会の関係国はすでに十八カ国（一地域）、派遣国は十三カ国（アメリカ・タイ・インド・スリランカ・イギリス・フランス・イタリア・オランダ・韓国・カンボジア・ドイツ・スイス・オーストリア）。受け入れ国は九カ国・一

昭和62年7月30日留学僧育英会　第2回総会

地域（アメリカ・スリランカ・韓国・中国・フランス・バングラディシュ・日本・台湾・ポーランド・ベトナム）になっています。

【令和二年第三十三回生まで、育英生百二十六名、関係国二十五ヶ国及び二地域】

留学僧の募集の範囲は、宗派を問わず、場合によっては僧籍がなくてもよし。学業操行とも優秀で道心堅固、仏道を信ずる心が揺るがないこと。仏法のため、人のためなら、自らの身命も惜しまずの人材――そうした世界の若者を選んで、留学中の旅費、生活費を負担して来ました。よくもまあ今日までこの至難の「行」が出来たこと不思議でなりません。

「檀家を敬うこと、仏のごとくすべし」という瑩山禅師の教えに従い、留学僧派遣・受け入れという一大事業の実現こそみ仏の成せるお力と思わずにはおられません。

寺檀一体となって各国に派遣された留学僧た

ちは、それぞれの立場で物を見、考え、修行にとりくんでおります。彼らが果たして何を持ち帰り、どんな行動を起こしてくれるのか、それはまったく未知数ですが、必ずや宗教宗派意識を超えて釈尊の教えを忠実に情熱を持って布教教化する国際的宗教者となってくれるであろうと私は信じています。

やがて十年後、二十年後の世界に活き活きとした仏法の泉を湧かせてくれることを思うとき、私の限りある生命が、世の中のなにがしかの役に立ち、一隅を照らすことができればよろこびです。

育英生たちには学んだことにつきレポートの提出を義務づけております。

（第二十九巻　抜粋）

■育英生からの報告

タサハラ禅マウンテンセンター・禅心寺の秋安居に参加して

興教寺副住職　浅　摩　泰　真

この度、私は横浜善光寺留学僧育英会三十二期生として、アメリカ・カリフォルニア州にある曹洞宗の禅堂、タサハラ禅マウンテンセンター・禅心寺（以下：禅心寺）にて修行させて頂きました。この禅堂は、アメリカで最初の禅院（禅宗における修行施設の整った道場）として1967年に鈴木俊隆老師によって建立されました。鈴木老師は、1959年に渡米され、日系アメリカ人が中心となって建立したサンフランシスコ桑港寺の住職に就任。

「私は毎朝、五時半から坐禅をしています。あなたもいかがですか」と書いた紙をお寺の前に貼り、ひたすら坐禅をし、布教を続けて、徐々に信者を増やしていきました。五十六歳でアメリカに渡られ六十八歳で亡くなるまで十二年間、この僅かな歳月でアメリカにおける禅の基礎を築かれたのです。現在ではサンフランシスコ禅センター、グリーンガルチファーム、そして禅心寺など、鈴木老師を源流とする流れは大河となって、アメリカで禅修行が行われています。

禅心寺は、サンフランシスコ都市部から車で五時間かかる渓谷の中にあります。最初はモントレー湾に沿って四時間ほど走り、内陸に進むと次第に険しいオフロードとなります。上下左右に揺られながら一時間、今度はハンドル操作を誤ったらはるか下に転落してしまうほどの崖

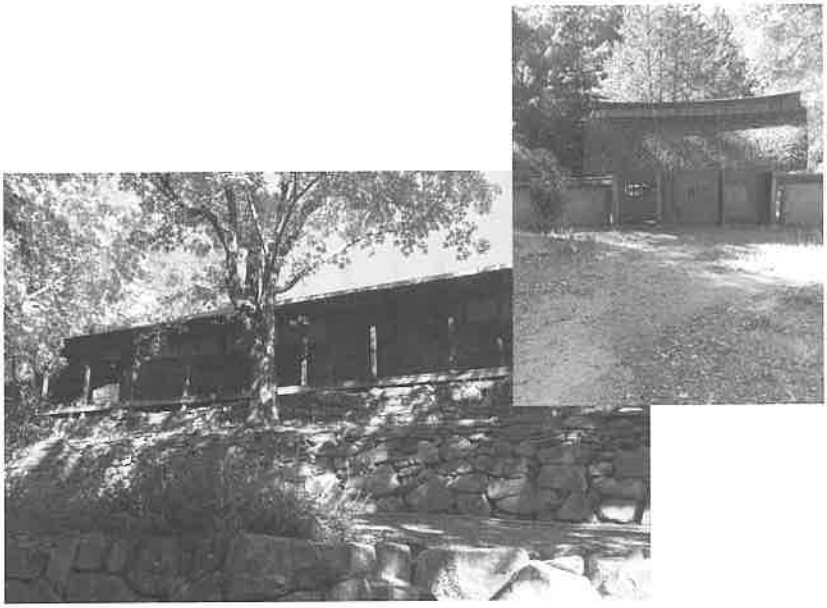
っ縁を進みます。普段はなることのない車酔いに必死に耐える私をよそに、同乗していたメンバーはスリルを楽しんでいるかのような感嘆の声をあげていました。

厳しい行程の末、視線の先に現れたのが、日本でも殆ど見かけなくなった郷愁漂う美しい茅葺き屋根の山門でした。横の木製の看板には白文字で、

「TASSAJARA ZEN MOUNTAIN CENTER ZENSHINJI」
（タサハラ禅マウンテンセンター・禅心寺）
と書かれてあります。

放飼式動物園を思わせる厳重な自動扉が開き中へ進むと、紅葉や銀杏の木立が静謐さを醸しだし、所々に配された真竹の垣根。禅堂や開山堂も日本建築であり、脇の小道に鹿やリスが姿を現し、奈良や鎌倉を彷彿とさせます。まるで、日本に瞬間移動でもしてしまったかのような光景は、激しい吐き気を一瞬で吹き飛ばしてくれました。

もともと温泉がでることから原住民であるインディアンの保養地とされていたそうで、四月後半から九月前半まではゲストシーズンとして秘湯を求めて来られる一般観光客も受けて入れているそうです。ゲストシーズンは朝から夜まで人の声が溢れかえっているのに対し、九月後



半から翌年四月前半までのプラクティスシーズンは、敷地内全てが修行道場として静寂が求められますので、大自然の営みを五感で感じることが出来ます。

禅心寺でも日本の禅道場と同様、禁足して九十日間集中的に修行する「制中」が設けられています。私は九月後半から十二月後半に行われる秋の制中「秋安居」に参加させて頂きました。「制中」への参加は、日常の作法、禅道場特有のルールや専門用語など一定程度の理解が求められる為、基本的に各道場で半年以上の修行経験がある者でないと参加出来ません。しかし、言い換えれば、一定の基準さえ満たしていれば、在家・出家者を問わず「制中」というこのプログラムに参加することが出来るのです。三ヶ月もの期間を在家出家の枠を超えて共に仏道修行に専念出来ることは、禅の世界に身を投じたい者にとって掛け替えのない場であると感

じました。

一日は坐禅から始まり坐禅で終わります。毎日六炷（一炷は、線香一本が燃焼する時間、約四十分）の坐禅、朝昼晩の食事も坐禅で、応量器という食器を用いて頂きます。昼から夕方にかけては作務が中心で、外部講師などが宿泊するゲストルームの掃除や、キッチンで調理の準備も勤めさせて頂きました。その他、堂長やプラクティスリーダーと呼ばれる人たちの法話の時間、今回のテキストである『正法眼蔵山水経』を講義とディスカッション形式で学ぶ時間もありました。希望者はお袈裟や絡子を縫う指導も受けることが出来ます。

一日の最後には「Three Refuges」という歌を歌います。これは仏教の三つの宝である「仏法僧」に帰依するお唱えです。坐禅で調えられた心から発せられる声は、お釈迦様の御教えが何の境も持たぬことを表すかの如く一つとなり、まるで大地そのものが歌っているかのようでした。その優しく包み込むようなメロディは、どんなに困難な一日であったとしても穏やかに終える為の助けとなりました。

また、月に一回約七日間の「摂心会」が設けられていました。「摂心会」とは諸々の仕事を放下して坐禅のみに集中する期間のことです。食事も含めれば十五炷の坐禅を行じます。基本的には、私語はもちろん、誰かとコミュニケーションをとること、自分の部屋で文書を読むこと、書くことも禁じられていました。

日常生活では作り出せない無駄なインプットもアウトプットも省かれた時間は、心を調えるという感覚を一変してくれたように思います。

食事は、日本の僧堂が、肉・魚・乳製品や五葷（ニンニク・ニラ・ネギ・タマネギ・ラッキョウ）が不使用なのに対して、禅心寺では、いわゆるベジタリアン料理という括りの食事です

（肉・魚以外は使用可）。朝は、お粥と汁物と一品。昼は、ご飯と汁物と一菜。夕方は、主にメディシンボール（日本でいう雑炊）と一菜。

基本的に穀物は様々な種類を頂きます。朝のお粥はオートミールやシリアル食品に、昼のご飯は大麦、キヌア、ブラウンライスなど様々です。汁物は、味噌汁やミネストローネの時もあれば、リンゴジュースやオレンジジュースの場合もあります。添菜は、豆腐の生姜炒めなど、日本風なものから、ミックスナッツや、ブルーベリーのみという日もあり、とてもバラエティに富んでおりました。日本では出てこない食材も多く、食事の時間は楽しみの一つでした。

バラエティに富んでいるのは修行仲間も同じです。今回は世界各地から集まった三十二人の仲間と修行をさせて頂きました。もっと仲間のことを知りたいと思い秋安居も残り一ヶ月を切った時に、改めて皆さんに一対一でお話をさせて頂く機会を設けて頂きました。

年齢は二十代から七〇代。国籍は、アメリカ、エチオピア、カナダ、ドイツ、フランス……そして一人だけ日本人。性別も、世に知られているカテゴリーのほとんどを網羅しているといっても過言ではありません。そもそも、集結した多種多様な人々を分類しようとすることに意味がないということに気づかされました。

彼らが修行に打ち込む理由も様々でした。多くは、ダイレクトに日本文化そのものを好み、学びを進める中で禅に共感した方や、ナチュラリズムと禅の生活様式がコミットしたことを理由に挙げる方でした。そもそも、カリフォルニアの文化は健康志向が強く、街中オーガニック製品を扱う店が立ち並び、その街中をヨガマットを担いで颯爽と歩く人が大勢行き来するのが日常の光景なのだそうです。

しかし、修行に来た理由を掘り下げて聞いて

みれば「病気」「被差別」「いじめ」「大切な人との死別」等々、私たち人間が直面する人生の根本問題に行き着いたのです。そして、この苦しみに貧富の差はないことも思い知らされました。企業の社長で私からみれば全てを手に入れているような方も、貧乏のどん底でここにたどり着いた方も、四苦八苦は人間全ての苦しみであり、解決すべき根本問題なのです。

この道場に集結した人々は皆、本当の幸せ、心の安らぎを求めて踠き苦しんできた人達でした。その人達を、大きく扉を開いて迎え入れたのが禅道場だったそうです。

最初は多種多様な修行者の混在する中で、本当に修行生活が円滑に進むのだろうかと心配していましたが、全くの取り越し苦労で、修行の日々は、乳水和合、皆が一つに溶け合って滞りなく進んでいきました。

修行は苦しいものと理解している人は多いと

思います。しかし、祖師方は修行は本来「安楽」だとお示しです。人生を苦しいものとしてしまう欲望に満ちた自分自身から解放して、安楽な生活を実現するのが修行だからです。だから、禅心寺に集う彼らはとても穏やかに満ち足りた様子で修行し、僅かな時間交わされる雑談でさえも、「ＺＥＮ」や仏教について語り合っていました。

私も最初は、言葉がなかなか聞き取れずに苦労しておりましたが、彼らと一緒に中庭の芝生やフリースペースのベンチ、図書館や、川のほとりに屯ろして、些細な話から仏教や禅について広がっていく会話の中にいることがこの上ない至福の時となっていました。

修行者の間でも特に尊重されているようでよく耳にしたのが、

禅の修行で一番大事な事は「二つ」にならない、ということ

という鈴木老師の言葉でした。

身と心、自分と他人、境をつくって二つにならぬように、執着を離れた坐禅の心で日常を過ごすことの大切さを示されたものです。

お釈迦様は十二月八日、明けの明星をご覧になり、大宇宙と隔てのない一つ命を生きていることを覚られました。我見を持ち込まなければ、草木と一つ命として在る、お釈迦様とも一つ命なのです。ここでの修行は、その教え通り大自然と一つ命となって過ごし、縁起の中に生きている真実を体感することが重要視されていました。修行の舵取りは大自然です。プラネタリウムでしか見たことの無い様な天の川の広がる星降る晩は、禅堂西側の広場にブルーシートと座布団と坐蒲を並べ坐禅をしました。皓皓たる満月の下で行ずる布薩は、包み隠さず全ての過ち

を懺悔せずにはいられません。

摂心中、天気がよければ川畔で経行をしたり、十月後半から入った雨季には、空いた時間に仲間と足を運び、雨音に身を寄せて時を忘れて坐り込みました。

制中の三ヶ月が終了すれば仲間たちはそれぞれの道を進みます。禅心寺に残る方や、もともと修行していた道場に戻る方。在家修行者の方たちには、職業に就いている方も沢山いて職場に復帰し、また修行に必要な費用が貯まれば禅心寺に戻ってくるという方もいました。それまでは自分の家で修行を続けるそうです。彼らにとって修行は安楽であり修行こそが救いであることは言葉にしなくても伝わってきました。

ある在家の女性修行者が禅の世界に導かれたのは、料理人になることを夢見て頑張っていた息子さんを突然の事故で失ったことでした。まだ二十歳だったそうです。息子さんへの愛着と

喪失感、暗闇、やり場のない怒りにも似た悲しみ、苦しみのどん底に落ち、それでも生きてゆくことを選択した彼女は、生きる自信を求めて禅の世界に飛び込みました。藁にもすがる思いだったのでしょう。

彼女は、「坐禅修行を中心とした生活が、今は亡き息子と一つ命を生きていることを実感させてくれました。私が、この人生を受け入れ納得して今を生きることが、まだまだ生きたかった息子の思いに応え、共に生きることなのです」と仰られておりました。彼女は自ら飛び込んだ禅の修行によって救われていたのです。

彼女の話を聞いて思い当たったのが、大本山永平寺での修行時代からお世話になっている西田正法老師が、「先祖供養の教化的再構成」として提唱されている「生き方としての供養」ということでした。

西田老師は、縁起の立場から教理として正しく説ける先祖供養を標榜され、「真の供養とは自らの生き方だ」と言います。暗闇から光の中へと歩みを進めた彼女は、「生き方としての供養」の実践者として、亡き息子さんとともに生きていました。

「禅の素晴らしさをどう伝えるべきか」との答えを求め、遙々サンフランシスコの禅心寺までやって来た私は、「修行こそ救いである」という一つの答えに辿り着きました。絶望の淵に立たされた人が、修行により実際に救われている姿は多くの人に希望を与えるのではないでしょうか。アメリカで育まれた禅が、日本人を救うことも大いに有り得るのではないでしょうか。

横浜善光寺留学僧育英会様のご支援によって、図らずも渡米することが出来、二十世紀の一時期、世界で最も豊かで自由な国であることを誇ったアメリカ合衆国で、物質文明と強力な自己主張との狭間で悩み悶える人達が、鈴木俊隆老

師によって伝えられた「ＺＥＮ」に救われている現実を目の当たりにすることが出来ました。

日本での禅は、現状から更にステップアップするための厳しく苦しい鍛錬法のような印象がとても強いように感じます。しかし、禅が仏教である限り、迷い苦しむ人々の救済こそが本来の姿であります。三ヶ月という短い期間の修行でありましたが、禅の修行はそのものが救いであることを改めて学ぶことが出来ました。救いとしての禅を自信を持って布教して行きたいと思っております。

最後に、貴重な体験をさせてくださいました横浜善光寺海外留学僧育英会様、また日頃からご支援を頂いております善光寺檀信徒の皆様方に衷心より御礼を申し上げます。

泰真　合掌

觀自在菩薩
般若波羅蜜多心經

一斉法要のご報告

【令和二年】

○新年祈祷会

一月九日、新年祈祷会が行われました。大般若法要では多くの御寺院様にご随喜いただき、新しい年を迎え檀信徒各家皆々様の「家内安全」を祈念致しました。

当日は、総勢三百六十名を超す方々が集まり、一緒に読経しご焼香をしていただきました。新年恒例の福引大会も、皆様楽しそうに笑顔、笑顔。金賞、特賞があたるかとドキドキ。

最後は大元組による和太鼓の奉納演奏。「仏様のご縁か、善光寺と縁を頂いてから多くの場所でよばれるようになり活動の幅が増え、海外でも好評を頂いています」と檀信徒の皆さまに感謝のご報告。迫力の演奏で今年も始まりました。

ニュース・アラカルト

○節分追儺法会

二月三日、節分追儺法会が行われました。

新年同様、大般若法要では多くの御寺院様にご随喜賜り、檀信徒各家皆々様の「除難招福」を祈念致しました。当日は、総勢三百三十名以上の方々のご参集。

新年に引き続き和太鼓大元組による奉納演奏。目前で打ち鳴らされる和太鼓の響きは腹の底にズシン、ズシンと届き、演者のハツラツとした動きに熱いエネルギーを頂きました。

最後は恒例の「シャンシャンシャン、オシャシャのシャン」との住職の掛け声により「福は内、福は内」。

会場一つになっての豆まきを行いました。

鬼を払って福よ来い！

ニュース・アラカルト

ニュース・アラカルト

○春彼岸法会以降　一般参列中止

今年の春彼岸・盂蘭盆会・秋彼岸は「新型コロナウイルス感染拡大予防」の為に、一般参列は中止させていただき、僧侶、総代など数名での法要を執り行いました。

毎年の恒例行事がこのような形になり大変心苦しく思います。それでも檀信徒の皆様と共にお勤めしているが如く、精一杯つとめさせていただきました。

盂蘭盆施食法会と秋彼岸法会に際しては、檀信徒の皆さまそれぞれ、ご家庭で同時刻にご一緒におつとめをしましょうとお声かけさせていただいたところ、多くの皆さまがその時間一緒におつとめ頂いたとのお話をして下さり、離れていても心がつながっていると感じることができました。

また不自由な状況にも関わらず、前年を上回るお塔婆の申し込みをいただき、参列できなくてもご先祖様のご供養をおつとめしたいとの檀信徒の皆様のお気持ちに触れ、大変心温まる思いです。ご先祖様を大切にすることは、自らを大切にすることでもあります。皆様のご供養のお気持ちが巡り巡って皆様に福楽をもたらします。

「新しい生活様式を」と言われる中、皆で集まり袖ふれあって、大きな声でお経をお唱えすることも難しい状況ではありますが、できることを模索しながらこれからも皆さまの供養の気持ちに応えて参ります。

○身代不動明王大祭

五月二十八日、身代不動明王大祭を執り行いました。

山内スタッフ数名のみでの法要でしたが、いつものように大般若を転翻してのご祈祷を行いました。今年は特に疫病退散。見えないウイルスの脅威に負けないように、檀信徒の皆さまのご健康を祈念申し上げました。

ニュース・アラカルト

坐禅研修会

今年は一月に企業研修坐禅会、二月にボーイスカウト坐禅会が行われました。

恒例のボーイスカウト坐禅会では、早朝よりお子様と保護者合わせて八十名を超える方が静寂の中参禅されました。坐禅後は住職より涅槃図のお話。小さいお子さんたちもみんなと一緒に一生懸命頑張りました。

※新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から大人数での坐禅研修会はしばらくお休みしています。詳しくはお問合せ下さい。

ニュース・アラカルト

水墨画と能のコラボレーション

二月十二日、「大人の休日倶楽部・趣味の会ツアー」のご一行が善光寺に来山されました。「寺院水墨画と能のゆかりの地めぐり」と題されたツアーは、水墨画家で作家でもある東野光生画伯の水墨画を背景に、シテ方金春流能楽師の山井綱雄先生の謡と舞を堪能するというジャンルを超えたコラボレーション企画。

今回の題材は、幅十五メートルにも及ぶ大作の障壁画「臨照図」。大作ゆえ普段は大切に収納しておりますが、当日は釈迦殿の窓際一面に展示しました。この作品は善光寺開創二十五周年記念事業の一貫としてお納め頂いた作品です。東野先生はその後も「十六羅漢図」など素晴らしい大作を納めて下さっています。

今回改めてこの大作を前にして、住職共々その素晴らしさに引き込まれました。

山井先生の能の演舞は普賢菩薩をテーマにしたもので、奉納された舞や謡が釈迦殿を心地良い静寂でみたしてゆきました。

東野先生、住職、山井先生

ニュース・アラカルト

熊谷豊太郎氏　逝去

令和二年三月二十八日、善光寺名誉総代熊谷豊太郎氏が逝去されました。数えで一〇四歳。

善光寺と熊谷氏とは昭和四十六年熊谷氏のお母様のご葬儀からのご縁でした。

プレス工業株式会社取締役として活躍されている中、快く総代を引き受けて頂いて以来約半世紀、寺の歴史を共に歩みました。先代住職亡き後も毎月二十九日の月命日には欠かさずお参りに来られました。

一斉法要では檀信徒の代表として毎回大きな声でご挨拶を下さり、寺と檀信徒の心のかけ橋を永くおつとめ下さいました。

衷心より謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

熊谷筆頭総代さまとの思い出

黒田　博志

熊谷豊太郎筆頭総代様。筆頭さまを思う時まず思い出すのは、師父大圓武志大和尚の月命日に必ずお寺にお参りに来て下さったことです。平成十六年十二月二十九日に師父が遷化し、年が明け通夜、葬儀。その月の二十九日の月命日のご供養から毎月必ずお参り下さいました。

右も左も解らない状況で住職を拝命し、不安な気持ちでいる中、毎月筆頭さまがお参りに来て下さり、いろいろなことを相談しご指導頂きました。そのお陰で私の中でいっぱいになっていた不安が、だんだん払拭されていきました。あの時ご指導いただきましたことは、今の私にとってとても大きな財産となっております。

またお檀家を代表して、育英会の理事も永年勤めて頂きました。理事会の懇親会では、必ず

戦争のお話をして下さり、そのお話に惹きこまれてあっという間に時間が過ぎてしまったことを思い出します。

よくお食事もご一緒させて頂きました。私との歳の差は約六十歳ですが、召しあがる量は私と変わらず、ときには筆頭さまのほうが多いぐらいでした。でも野菜はお嫌いでしたね。野菜の料理が出されると、お皿をご自分の箸が届かないところに遠ざけたり、私に下さったりして全く口にされませんでしたね。長生きに野菜は関係ないのではないか？　と、思ったことを思い出します。

ニュース・アラカルト

行事の度にご挨拶をお願いし快くお引き受け頂きました。お檀家さんへお伝えする内容をよくまとめてお話して下さいました。勉強家で仏教のお話もして下さいましたね。お檀家の皆さんに囲まれ、「人生百年時代」の模範のようなお姿を昨日のことのように思い出します。

いつも、温かいお心遣いを頂き、お寺のこと、お檀家さんのこと、山内スタッフのこと、家族のこと、私のことを気にかけて頂き本当にありがとうございました。筆頭さまから頂いた御恩情に感謝申し上げ、ご安心していただけるように日々精進して参ります。衷心より篤く御礼申し上げます。ありがとうございました。

花まつり

四月八日は花まつり、お釈迦さまの誕生日をお祝いする行事です。

日本では、推古天皇の時代（六〇六年）、およそ一四〇〇年前に行われたのがはじめといわれています。明治時代に入ると、お釈迦さまの誕生日がちょうど桜の季節であることから「花まつり」という名称が多く使われるようになりました。

花まつりの際には、お釈迦様がお生まれになられた日に、甘露の雨が降ったという故事に基づき、誕生仏に甘茶を灌ぎお祝いを致します。

来年は皆様と一緒にお参り出来ることを願っております。

ニュース・アラカルト

岑翠前会長の書を御寄贈頂く

全日本新芸書道会会長遠藤吟翠様より同会前会長の故遠藤岑翠師の書をご寄贈頂きました。

昨年、岑翠前会長ご逝去の際に、博志方丈が遠藤会長に「是非、お寺に岑翠先生の作品を御寄贈願えれば……」とお願いしたところ、快く応えて下さり、今回の運びとなりました。

善光寺とのご縁深い全日本新芸書道会。博志方丈をはじめお寺の僧侶も同会に所属して研鑽を積んでおります。

実はこの秋、第九十九代内閣総理大臣になられた菅義偉衆議院議員も昭和六十年頃より同会で書に親しみ、前会長のもとで手ほどきを受けておられたとのこと。気になる総理の筆さばきについて、遠藤会長は「会の大家らは『(菅総理の書を)決して達筆ではないが……』という枕詞をつけつつも『実直さが表れている』と口を揃えて仰ってます」と明かしてくれました。

現在も菅総理は同会の名誉顧問として名を連ねておられます。

「意志あれば道あり」と書かれるその言葉通り、強い意志で道を歩まれる菅総理。地元選出の総理大臣の誕生に善光寺も寺の理念、その志を掲げ、しっかりと道を歩むべく、気持ちを新たに致しました。

大本山永平寺ご住職に南澤道人禅師が御就任

令和二年九月二十九日大本山永平寺貫首福山諦法猊下が退董され、同日付にて大本山永平寺副貫首南澤道人老師が大本山永平寺第八十世貫首に就任されました。

善光寺と致しましても南澤禅師には、善光寺留学僧育英会の名誉顧問を長くおつとめ頂き、また平成七年当寺開山楳庵白純大和尚十七回忌法要ではご導師をお勤め頂くなど親しくご縁を頂戴しております。博志方丈も永平寺で修行中、監院のお役でいらっしゃった南澤禅師に大変お世話になりました。

これに伴い新たに群馬県迦葉山龍華院ご住職羽仁素道老師が副貫首に就任されました。羽仁老師は本寺大田原光真寺の黒田泰弘老師の奥様のお父様であり、善光寺も親戚として大変親しくご縁を頂戴しております。天狗で有名な群馬県沼田市迦葉山には平成十八年善光寺旅行会で参拝しております。

ニュース・アラカルト

おうちで「写経・写仏のすすめ」

今春、緊急事態宣言の発令をうけ、外出自粛やテレワークへの移行などで多くの方が自宅で長時間を過ごすこととなりました。そのような「ステイ・ホーム」の状況に、善光寺では写経・写仏をおすすめ致しました。

写経・写仏は自分を見つめる修行でもあります。自分自身を見つめ、仏さまの御心とひとつに過ごすことで、穏やかに日々を過ごすきっかけとしていただければ幸いです。

お盆のご案内と一緒に「写経・写仏セット」をお送りしたところ皆さまからたくさんの写経・写仏が届きました。

丁寧に書写された写経や思い思いの色で彩られた写仏を見ると皆さまの清らかな仏心を感じ、有難い気持ちでいっぱいになります。お納め頂いた写経・写仏は今後、観音堂へ納経を致します。

一回目のお写経は『延命十句観音経』、写仏は三喜庵先生の仏画（『成寿』四十九巻の表紙）でした。

続く二回目・秋彼岸の案内では「写経・写仏セットその2」として『妙法蓮華経観世音菩薩普門品偈』。長いお経なので数回に分けてお写経頂く第一回目。仏画は釈迦殿客殿にある絵皿から写仏して頂きました。

新型コロナウイルス感染拡大防止の為不自由を強いられる中、少しでもやすらぎの時間をお過ごしいただきたいと始めた企画。多くの反響を頂いております。今後も続けて参りますので是非チャレンジして下さい。

写真上＝「切り絵で写仏」
野倉高明様より

写真右＝皆さまから寄せられた
多数の写経・写仏

ニュース・アラカルト

■新型コロナウイルス感染症拡大防止対策
――善光寺の取り組み――

善光寺においても二月末より新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として様々な取り組みを行っております。

○催事・講習会の休止

（ご参加頂く皆さまのお寺までの移動リスクも鑑み休止しております。）

○春彼岸法会・盂蘭盆施食法会・秋彼岸法会の一般参列中止

（法要は住職はじめ僧侶中心に執り行いました。）

○法　事

檀信徒皆さま方の法事に関しては、寺より延期や中止を促す事はしませんでしたが、四月から六月迄の緊急事態宣言下では、各ご家庭の判断で延期や中止が多数ありました。緊急事態宣言終了後は徐々に法要件数、参加者人数ともに増えています。

○日常の取り組み

・三密を防ぎ、換気の徹底
・玄関にアルコール消毒液の設置
・職員・僧侶のマスク着用並びに法要参列者へのマスク着用依頼
・客殿（待合室）の座席数を減らす
・法要時間を分散し、待合室の混雑を防ぐ
・テーブルにウェットティッシュを設置
・法要ごとにテーブルをアルコール消毒する
・本堂のイスの配置間隔を広くする
・定期的に次亜塩素酸水を噴霧（本堂、客殿など）
・玄関での検温（非接触型検温器導入）

安心してお参りしてもらう取り組みを行い、催事・行事につきましても再開を目指して参ります。

・法要時の経本配布を止めて般若心経をプリントして配布
（裏面には法話掲載、「和尚のひとりごと」）

☆「和尚のひとりごと」を配布　従来より法要時には参列者に経本を配り、一緒にお経をお唱えして頂いておりましたが、四月より経本の代わりに般若心経を印刷したプリントをお渡ししてお持ち帰りいただいております。そのプリントの裏面に「和尚のひとりごと」と題して毎月法話を掲載しています。

和尚のひとりごと

①「春は花」

4月

先日より善光寺の霊園のブログにて園内を彩る春の花を紹介することになりました。簡単な文章を添える役目を任された私は、その日から春の花と向き合う日々が始まりました。河津桜からはじまり、ソメイヨシノ、シャクナゲにアイリス。春の花って思っていたより多いものです。もともと花に詳しいわけでもなく、インターネットで調べたり、家の植物図鑑に目を通したりなど、試行錯誤する毎日を送っています。

ある日、ヒメリンゴに添える一文に悩み、帰り際にもう一度花を見に行った時のことです。花散らしの雨の中、飛ばされそうな傘を抱えて木に近づいてみました。そこには、とろけた桜の花びらを足元に、純白のヒメリンゴの花が雨風に靡きながらも凛と鮮やかに命の輝きを見せてくれていました。

植物は与えられた環境から自分の足で離れることはできません。春の穏やかな晴れの日、雨の日も風の日もすべての縁を受け入れて生きなければなりません。それでも、春が来れば花を咲かせてただひたすらに命を生き続けるのです。

一方、私たちは、雨風のような試練に出会った時、逃げ出したくなる時もあります。先行きが見えないと感じて苦しんでしまう時だってたくさんあります。頭で考えると、「ただひたすらに命を生き続ける」というのは簡単なことではなさそうです。

道元禅師様のお詠(うた)に

春は花　夏ホトトギス　秋は月
冬雪さえて　すすしかりけり

とあります。

この「すすしかりけり」とは「目元が涼しい」という意味合いです。つまり「非常に新鮮である」「はっきりしている」という意味です。

静かに坐り、冷静にありのままの自分を見つめれば、その瞬間瞬間の有り様が非常に新鮮に映し出されるのだというのです。

よくよく私自身の命に目を向ければ、楽しい時や嬉しい時、悲しみの時も、迷いの時も、どんなときも変わらずに、自らを生かそうと休むことなく鼓動を打ち、呼吸をしています。命をただひたすらに生き続けているのは植物だけではなく、私たちの命も同じなのです。

ありのままを見つめ、瞬間瞬間の新鮮な命の輝きに気付いていく。そこに、どのような環境でも心安らかに生きるヒントがあるのではないでしょうか。

私たちも花のように大自然として生きていきたいものです。

合掌

（記　泰真）

②「入れ替えてみると」　5月

先日、「ステイ・ホーム」を「ホーム・ステイ」と言い間違いして皆に笑われてしまいました。でも言葉の順序を入れ変えてみると随分と違った意味になるものです。

「ホーム・ステイ」は家族以外の人を家に受け入れること、また受け入れてもらうこと。自然に心は開放的になります。

これに対して「ステイ・ホーム」で家にいるだけでは心もふさぎ込んで閉鎖的な気持ちになりがちです。それでも感染拡大防止、医療崩壊を防ぐためには一人ひとりが出来ることをしていかなければなりません。

先の見えない不安を抱え感染の恐怖に怯える中、私たちの心の内が知らず知らずのうちに閉鎖的にならないように、心を広く柔軟な気持ちで日々を過ごしたいものです。

仏教ではだれの心の中にも「三毒（さんどく）」と呼ばれる苦しみの元となる心があると説かれます。貪（むさぼ）り・怒（いか）り・愚（おろ）かさの三つです。今の世相にあてはめて考えると……

○先の見えない不安からデマに踊らされ、買占めなどに躍起になる貪りの心。

空の商品棚を見て「どうしよう、自分の分がなくなってしまう」と慌ててしまう心理。

○激変した生活に慣れずにイライラして感情が制御できない瞋（いか）りの心。

後から冷静に考えると自分が悪かったと思ってもつい負けじと言い返したり、親しい家族や弱いものにあたったり、自分の優越を誇示しようとする心理。

○恐怖から差別や風評被害を起こしてしまうよ

うな愚かさの心。

情報に踊らされ「騙されないぞ」と疑心暗鬼。他人を信用出来なくなり、自分が正しいと思い込み他を許せなくなる心理。

誰の心の中にもあるといわれる「三毒」。その三毒から離れるにはどうしたらよいのでしょうか。

道元禅師様は、

日日の生命を等閑にせず、
私に費さざらんと行持するなり

とお示しです。

多くのご縁の中で生かされている私たちの生命を無駄に過ごさず、自分の事ばかりに心を費やすことなく、自分以外へ慈しみの心を向けること、それが「三毒」から離れる修行の要です。

「ステイ・ホーム」＝家にいるひと時に、自分自身を見つめ直し心静かに、姿勢を正し、呼吸を調える時間を持つことで他人を思いやる慈悲の心は育まれて参ります。

「三毒」に侵されることなく心広く柔軟な気持ちで、お互いさまにこの緊急事態を乗り越えて参りましょう。

合掌

（記　武男）

③「雨の詠」　6月

梅雨の季節が近づいてくると、道元禅師様のこのお詠が思い起こされます。

聞くままに　また心なき身にしあれば
おのれなりけり　軒の玉水

「ただひたすらに坐禅に打ち込んでいると、屋根の端からポタポタと落ちる雨だれと、坐禅をしている私が一つになっていた」というのです。

八年前、修行僧として永平寺にいた私は外国人の方に対応する国際部という部署におりました。英語が苦手な私は、話しかけられる度にたじろいでばかり。しかし、そんな私の心境を一変させる出来事がありました。

ある日、外国人の方と一緒に坐禅をした時のことです。始まりの鐘が三声、カーンカーンカーン。風に揺られて木々がと擦れ合うカラカラ。川のせせらぎ。微かに聞こえる呼吸。自然と私、誰かと私が融和していく最中、浮かんできた思いがありました。

「この時間は国境も性別も年齢も何一つ関係ない。ただ命が並んでいるだけなんだな。」

それから私が、今まで恐怖に感じていた言語の壁もなんだかちっぽけで無駄なことに感じてきたのです。

あとは時間が流れたことも忘れて、ひたすらに浮かんでくる思いを追いかけず、作法に従って息を調えました。坐禅の終わりの鐘がカーンとなった時には、坐禅前のモヤモヤした気持ちが不思議に消えて、心が穏やかになっていました。

偏った見方を自分自身で作り出してしまう人

間にとって、ただそこにある尊い命を曇りなく真っ直ぐに受け止めることの大切さを国境を超えた坐禅が教えてくれたのです。

聞くままに　また心なき身にしあれば
おのれなりけり　軒の玉水

自分と他人を比べては、争いが止まないこの世の中。雨だれと自分が一つになるように、自分と他人の境の無い坐禅の心で、安らかに日々を過ごして参りたいものです。

合掌

（記　泰真）

④「おーい、お茶」　7月

「おーい、お茶！」

「以前は、声をかけたら持ってきてくれたけど、今は『おーい、お茶』と言って仏壇にお供えするんだ。」

お檀家のおじいさんが笑いながらお話してくれました。それは寂しさと共に亡き奥様に対する愛情があふれた語り口でした。

「失ったものの大きさは、与えられていたものの大きさである。」

当たり前のように思えるものも実は当たり前なことなどないのです。普段よく使う「有り難う」とはそんな当たり前と思っていることが実は有ることが難しいことであることをふまえての感謝の言葉です。

コロナ禍の中、当たり前と思われていた日常、大きな声で語り、笑いあえることや、好きなところに自由に出かけられることなどが、なんて素晴らしいことだったのか。そんな日常がいかに多くの人やものに支えられていたのかをあらためて感じます。

人はひとりでは生きていけない。お互いに支えあいながら生きている。お互いさまの精神で生きることの大切さが問われています。またそのお互い様の関係は、今生きている者同士だけでなく、亡くなられた方とも続いています。

亡き方に手を合わせてお参りをしている私の事を、同じように亡き方が手を合わせて見ていてくれる。「大丈夫？　元気でやっている？」と。

そのような声無き声をしっかりと受け止めて何気ない日々を大切に生きて行く。

受けた恩は石に刻み、
かけた恩は水に流せ

私たちはとかく自分がしたことは覚えているのに、してもらったことはすぐに忘れてしまいます。何々してあげたのに……こんなに頑張ったのに……など。

でも生きていると知らず知らずのうちに、してもらっていることのほうが多いです。生まれてから今まで誰の世話にもならずにきた人などいないはずです。家族や友人など目に見える関係性の方からだけでなく、目に見えないけれど生活に必要な様々なものを支えてくれている人々もいらっしゃいます。

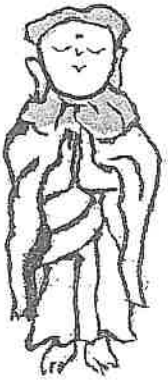
想像力を働かせて自分の身の周りを眺めれば、いかに多くの人やものに支えられて私たちの生活が成り立っているかに気付かされます。

当たり前と思うと愚痴も出ます。でも「有難いなぁ」と声に出して言うことで、何気ない日々を大切に受け止めていけます。私たちができることは、大切な方から送られた様々な恩をしっかりと胸に刻み、自分も誰かのために、何かのためにとお互い様の心をつないでいく。

おじいさんにいれて頂いたお茶を有難く飲みながら、心が満たされていくのを感じました。

合掌

（記　武男）



⑤「盆の風鈴」　8月

渾身口に似て虚空に掛かれり
東西南北の風を問わず
一等に他が為に般若を談ず
滴丁東了滴丁東

道元禅師様の師匠である如浄禅師様の「風鈴の偈」です。

「風鈴」は簡単にいえば私たち自身であり、「虚空」は私たちの今生かされている命のことです。「般若」はこの命そのものが導く仏の教えのことです。「心の境」である分別から離れ、自分の命を見つめれば、ただひたすらに生きようとする命があるのみです。

この命に身を任せ、風鈴のように空っぽで我欲のない心は、東西南北どのような風が吹いても素敵な音色を奏でるというのです。

七年前、祖母の葬儀を執り行いました。九十六歳の大往生であったにも関わらず、お経を読むこともままならない程に涙が止まらなかった記憶があります。いわゆる「おばあちゃん子」であった私は、その事実を受け止めるのに少し時間がかかっておりました。「祖母に聞きたいことがあった。話したいこともまだまだあった」と後悔は募るばかり。大切な人を亡くす苦しさと共に、離れなければならない「生死の境」とは溝深きものだと改めて思い知らされた出来事でした。

それから一年ほど経ち、二回目のお盆を迎えた時のことです。親族と集まって食事をしていると、義叔父が「おばあちゃんの『キワ』という名前の由来を知っている者はいますか?」と聞きました。すると、あっちでは「《喜ぶ》に《和

む》でキワと言っていた」といい、こっちでは「それはおばあちゃんが自分で考えたと笑って言っていたよ」などと色々なエピソードが湧き出てきたのです。

血を分け合った何人もの親族が祖母の口調を真似て語る姿を見て姉は、「おばあちゃんがいるみたいね」とつぶやきました。今はここにいなくとも、心を共に過ごすことができる。途切れない会話の渦の中に不思議と祖母が息を吹き返したかのような瞬間でした。祖母が側にいると感じたら心のわだかまりがすーっと消えていったことを今でも鮮明に覚えています。

よくよく考えれば、「お盆」は単なる先祖供養の期間というだけでなく、故人やご先祖様と共に過ごすことで、自ずと「自分と他人」、「生と死」という「心の境」から離れる修行をしていたのです。さまざまな分別から離れ、縁に身を任せた時に、私たちは本当の自由と豊かさの中で生きることができるのです。

どのような風が吹いても、風鈴のようにチリーンと素敵な音色を奏でる自身であり続けるのが仏の修行です。自分で命を絶つほどに苦しむ現代を生きる子どもたちにも、「お盆」という日本人の心の豊かさの一端を担ってきた大切な文化を、絶やさず伝えていきたいものです。

合掌

（記　泰真）

⑥「杖言葉～つえことば～」　9月

「菊つくり、菊見る時は　陰の人」
作家、吉川英治の言葉です。

先日、お葬儀の打ち合わせの際、亡くなられたお母様について息子さんと話していると、「母は子供の頃に聞いたこの言葉にとても感動したそうで、この言葉をしっかりと胸に刻んで生きてきたような人でした。」との話。

残された者が亡き方を偲ぶ時、様々な思いが湧き上がってきます。そのなかで、ふと浮かんだ母親の姿なのでしょう。とても印象に残る話でした。

目立つ大輪の花にばかり気をとられるのではなく、茎や葉っぱ、そして根っこを大事にするような生き方。そして何より、子供の頃に聞いた言葉を大事にして人生を歩まれたこと。人生の指針となる言葉、時にふらつきそうになるこころを支えてくれる杖のような言葉を持つ大事さ。また、その言葉を実践して生きてくことの大切さを学びました。

落ち込んだり、不安になったりしたときに自分を支えてくれる「杖言葉」。

今は亡き大切な方々からかけられた言葉。振り返ればそんな大切な言葉が皆さまにもきっとあると思います。

身を削り　人に尽くさん　すりこぎの
その味知れる　人ぞ尊し

今は亡き師匠がよくお唱えしていた句です。禅寺では朝食にお粥とたくわん、そして「ごま」をいただきます。その「ごま」をする「すりこぎ棒」をクローズアップした句です。

お食事を作って頂くことに対しての感謝の意

味だけでなく、他の誰かの為に一生懸命努力している人の労苦をしっかりと感じ取り、感謝する気持ちを抱きながら生活できる人こそ尊いとの教えです。また、そのように生きなさいとの教えでもあります。

口癖のように「人に尽くしなさい」と言っていた師匠。若い頃には「そんな単純なことが、仏教なのか……」と反発する気持ちもありましたが、今振り返れば大事な教えでした。

我が身を削り他人の為に行うことや、他人の苦労を理解して感謝の気持ちを持つことなど、頭で理解したつもりでも、実際にはなかなかできないものです。ついつい自分に都合の良い行動をとってしまいます。良い言葉や教えなどを聞いて、その時は「そうだなぁ」と頷いても、自ら実践して体現しなくては本当に身についたとは言えませんね。

子供の頃に聞いた言葉を胸に刻んで歩まれた女性。そしてその言葉を母の生き方として表現された息子さん。素敵なお話に、師匠の言葉をふと思い出し、自分の生き方を見つめ直しました。

皆さまの杖言葉はなんですか。

合掌

（記　武男）

⑦「放下着」　10月

「放下着（ほうげじゃく）」という禅語があります。「着」とは執着のこと。自己中心的ないっさいの思い込みから離れることの大切さを説かれた言葉です。この深い意味を学ばせていただいたのは三年前の初秋のことでした。

毎月お寺で行われている坐禅会に向かう為に乗った電車が、事故で遅延してしまったのです。その日は相談がある方が来られる予定でしたので、とても焦っておりました。乗り換えたバスを降りるなり走り出し、脱穀機がある倉庫の横を抜けて、橋を渡り、寺がある坂をめがけて、田んぼ道を走り抜けました。そこは、毎日手伝いをさせていただいている善光寺さんから、住まいとしているお寺へ向かう通い慣れた道でした。

なんとか坐禅会受付十五分前にお寺に滑り込み、息を調えながら、衣に着替えて本堂に行くと、「うわー。」と堂内を舐めるように見回している人がいました。今日の相談者である加藤さんです。三十年以上シンガポールに住んでいたそうで、日本のお寺に入れることがとても嬉しかったそうです。

坐禅が終わり、話を聞こうとすると、「もう解決した気がします。」と仰いました。驚いて理由を尋ねると、とても晴れやかな表情で語りはじめられました。

「久々に触れた日本のデザインは海外に比べてとてもシンプルでストレートですね。白黒で表現された書も、あの花瓶のススキも、そのものの良さが不思議とまっすぐ心に突き刺さってくるのです。さっき、説明の時に『浮かんでくる思いを追いかけず、電車の窓から見える景色が次々と過ぎ去っていくように受け流していきましょう』って言われましたよね。そうすると

色々なものが削ぎ落とされて、とてもシンプルな自分になっていく。今日、初めて坐禅しましたけど、日本の文化の根底にはこの坐禅の教えが根付いている様に感じました。また、日本には四季がある。気候に伴って花や草木もどんどん変わっていく。最近は毎朝窓を開ける度に別世界に感じるほどです。新鮮で輝いて見えるんですよ。でも、また長く居たら変わってきちゃうのかな。だから心をリセットする坐禅の修行が必要なんですね。」

結局、私は何も語らず、いつものお寺の光景と坐禅が悩みを解決してくれて、加藤さんは清々しいお顔で帰って行かれました。その後ろ姿を見ながら「見慣れた本堂や日々の景色からもこんなに学ぶことが出来るのか。」と反省しました。

次の日の朝、いつものバス停までの道を歩きました。お寺の坂を下りて進むと、橋のすぐそばの畑にはコスモスが盛り咲いていました。脱穀機がある倉庫までの間には、例年よりも早く咲いた彼岸花が並んでおり、命の終わりを迎えようと項垂れていました。田んぼに目をやれば、朝日に照らされた金色の稲穂の絨毯が風に揺られています。そして、そのお米で育った私がいるのです。その全ての命の営みは確かに光り輝いて私の目に飛び込んできました。

「放下着」の生き方は日常生活の中であっても、坐禅と同じように、思いはからいや自分の価値観で物事を判断する分別から離れることです。それにより今この瞬間、日常を生きる中で大切なものがちゃんと見えてくるのです。

外出が制限され、代わり映えのない新しい日常を生きる私たちにとって大切なことではないでしょうか。

合掌

（記 泰真）

⑧「落葉に想う」　11月

裏を見せ　表を見せて　散る紅葉

良寛

裏表なく自然体で生きた曹洞宗の僧、良寛さん。この句は晩年亡くなる前の作といわれます。

秋も深まり各地で紅葉のニュースが聞こえてくる中、街中でもヒラヒラと木の葉が舞い散る季節。皆さまは落葉を見て何を感じますか？

「落葉掃除のコツは、最後に葉っぱを少し残すことだよ……。」

山深い修行道場にいた頃、落葉掃除をしている時に先輩の僧侶にいわれた言葉です。風が吹いたら雪のように舞い散る葉っぱ。「そうですよね。キリがないですものね。」ため息まじりに頷く私に先輩は続けます。

「自然には逆らえないという考えも一つだけど、掃除をしていると徹底的にきれいにしたくなるじゃない。そうすると葉っぱ一枚でも残すと気持ち悪くてさ。落葉とのおいかけっこ。そのうちイライラして風に八つ当たり。しまいには、どうせやっても無駄だよって投げ出してしまうよね。完璧を追い求めての掃除は修行にならないよね。仮に完璧にできたように見えてもそれは自己満足。そのうち他人と比べたり、出来ない人を批判したりして、修行からどんどんかけ離れていってしまう。」

嫌々掃除をしている私の姿を見て先輩は何か感じたのでしょうか、更に続きます。

「『修証義』というお経は知っているよね。修行の修と悟りを表す証。曹洞宗の教えは悟りを追い求めて修行をするのではなく、修行している行為そのものがお悟りなんだ。修行は手段じゃないんだ。一つひとつの行いをしっかり丁寧

にする中に悟りは現れているんだ。この落葉掃除もそう。きれいにしようとする目的にとらわれるあまりに一つひとつの行為を雑にしては駄目だよ。坐禅だけじゃない。日常の行動すべてが修行なんだよ。」

優しい語り口で注意を受け、自分の至らなさに恥ずかしさを覚えるのと同時に、落葉掃除という当たり前のように行う作業から曹洞宗の教えを説かれる事に感動をしたことを思い出します。

修行とはその時その時に誠意をもって丁寧に物事に向き合う事。その積み重ねです。

でも「言うは易し、行うは難し」。つい気分に左右されることもありますよね。そんな時こそ「フッー」とひと息、深い呼吸をして、ゆっくりでも丁寧に行うように心がけたいものです。丁寧な行為は、乱れている心を調えてくれます。面倒くさいなと思っていると顔（面）も下を向き、首が倒れてしまいますが、顔を上げてしっかりと前を見ると気分も前向きになってきます。身体と心は密接につながっているのですね。

完璧な理想なんて目指さなくてもいい。日常を丁寧に過ごし、楽しみながら自然体で生きて行く。冒頭の良寛さんの句のような境地にはとても及びませんが、落葉を見て初心を思い起こしました。

合掌

（武男 記）

善光寺霊園ニュース

～横浜やすらぎの郷霊園～

現在、新型コロナウイルス感染拡大防止対策として次の対応をしております。
ご理解・ご協力の程、宜しくお願い致します。
開門時間：九時～十六時（時間外でも通用門より出入りできます）
定休日　：水曜日・木曜日（当面の間、木曜日も事務所を閉めています）
※いつでもお墓参りはできますのでご安心ください。

◎霊園のお花

ステイホームの期間中でも自然はその営みを自粛しません。お墓参りに来られない方にも霊園の季節を感じてもらえればと、やすらぎの郷「折々の花」をホームページに掲載しました。その一部を紹介します。

○芝桜のじゅうたん

門をくぐると、やすらぎの郷霊園を象徴する大きな球体のモニュメントがあります。融通無礙、滞りなく角のない「まぁるい心」を表しています。その裾を春になると彩ってくれるのが芝桜です。

一つひとつの花は小さいのに、連なって咲くのでまるで絨毯のように広がりを見せてくれます。一つの命から生まれた私たち。境の無い「まあるい心」で生きてみたいものです。

○ゆっくりあせらず丁寧に

正門前の参道には、見上げる空にとても映える紅白のハナミズキがあります。白の方は、遠くから見れば白にしか見えませんが、手をかざし、目を凝らして見ると、花びらの縁が薄紅色に赤らんでとても繊細な色合いに心惹かれます。

ハナミズキの花言葉は「永続性」。これはハナミズキがゆっくり育つことに由来します。現代では、様々なことにおいてスピードが求められることが多いと感じています。

人生もあせらず丁寧に過ごしていれば、いつかは良い花が咲くのだと教えてくれているのかもしれません。

○ゆとりに咲く花

サンスベリア。マイナスイオンが発生する事で脚光を浴びた観葉植物のサンスベリアです。

実はこのサンスベリア、花が咲くのです。葉っぱは目にしても花を見たことのない人も多いのではないでしょうか。株を大きく育てるなど条件が整えば咲くそうですが、それでも毎年というわけではありません。

また、葉っぱに囲まれて花を咲かせては枯れていくので見落としてしまっている時もあるかもしれません。

日常も慌ただしく過ごしていると様々な事を見落としがちです。心にゆとりをもって見つめると、案外大切なことは身近にあるものですよね。外になかなか出られないこのご時世も、身近な幸せに気づける最高のチャンスかもしれません。

○千年の時を超えても

ツツジが咲きました。薄紅色から白へと向かうグラデーションがとても綺麗です。ツツジは古くから日本で親しまれている植物です。万葉集にもツツジを詠んだものがたくさんあります。

風速の美穂の浦みの　白ツツジ
見れどもさぶし　亡き人思へば

河辺　宮人

亡くなった美しい人の事を思うと、美穂の浦（姫島）に咲く白ツツジを見てもさびしいという意味だそうです。

歌人が美しい人とツツジを重ね合わせている様を、千年以上の時を超えた現代でも共感できることを思うと、不思議と心が温かくなります。霊園のツツジも毎年変わらず可憐な姿で私たちを魅了してくれています。

○まだら模様

紫陽花が咲き始めました。先日の朝日新聞「天声人語」に歌人、渡辺水巴の詠が紹介されていました。

紫陽花や　白よりいでし　浅みどり

「浅みどり」とは空色のこと。記事の中で筆者はこの詠を受けて「顔を近づけてみると緑、白、そして空色のまだら模様があった」と述べていました。

私も霊園の紫陽花を覗いてみると、蕾がポツリポツリと「空色」に綺麗に染まっていました。緊急事態宣言が解除されてもまだまだ気の抜けない状態であることには変わりありません。

今はまだ、まだらの状態ですが、外出した空の下、行き交う人々の瞳に「空色」が一斉に映し出されることを願うばかりです。

○アジサイが見頃です

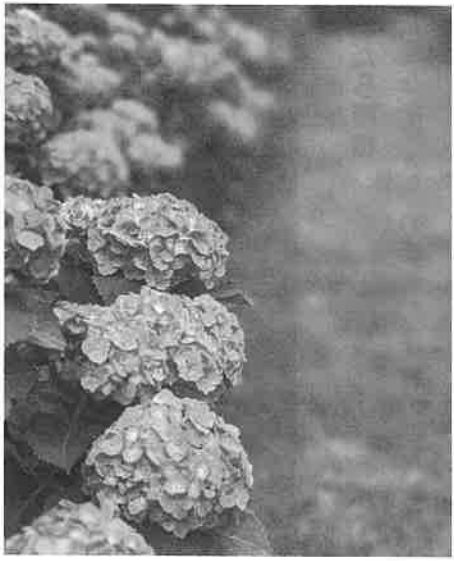
梅雨の季節、外出するのはなかなか気分が乗らないものですよね。そんな気持ちを振り払って「さあいこう！」と一歩踏み出した皆さんを癒してくれるのがアジサイ。

この恵の雨を受けて霊園のアジサイもとても綺麗に咲きました。紫、青、ピンクの鮮やかなグラデーション。一つとして同じ花はありません。

人間はフィジカルディスタンシングに気を付けなければいけませんが、アジサイは今年もとても密に咲いています。

雨上がりの日にはどうぞお参りにお越し下さいませ。

夏の植え替えをしました。



○夏の植え替え

管理事務所前に植えたのは、サンパチェンスとコリウス。

みなさんが思い切って外に出ることができる時には成長した姿を見せられると嬉しいです。

ちなみにサンパチェンスの花言葉は「太陽のように輝く笑顔」。コリウスは「健康」です。みなさんの心の健康と、日々笑顔で過ごされていることを願っております。

○暑さ寒さも彼岸まで

正門のモニュメントの足元にひょっこりと顔をだした彼岸花です。

今年は、晩夏も例年に見ぬ猛暑に見舞われました。夏が終わるのか不安になる程でしたが、「暑さ寒さも彼岸まで」ということわざの通り、彼岸に入ると途端に秋の空気になってまいりました。

彼岸は、どのような苦しみに出会おうとも、季節の節目を迎えることのできる縁を尊び、我が身心を正しながら過ごす大切な期間です。節目を重んじる日本ならではの伝統。

向かい風の中を凛とまっすぐ花を咲かす術をご先祖様は教えてくれています。

〔目的〕

仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1．Zen Center of Los Angeles（LA 禅センター）
“923 S.Normandy Ave., LA., CA90006U.S.A”
2．Zen Mountain Center of NewYork（NY 禅センター）
“Box197,Mt.Tramper,NY12547U.S.A”
3．Zen-Zentrum Eisenbuch（アイゼンバッハ・禅センター）
“Eisenbuch 7 D-84567Erlbach Deutchland Germany”
4．WatPaknam（ワットパクナム）
“Bhasichareon Bangkok, 10160 Thailand”
5．理事会において必要と認めるその他の研究機関、仏教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

令和４年４月より１年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

〔募集人数〕

令和４年度若干名

〔提出書類〕

1．日本語の論文（次の論題より、いずれか一題選択）
①これからの国際交流と仏教の役割
②世界平和と仏教徒の誓願
③留学僧として私はこれを学びたい
④異文化の中で仏教を学ぶ
A4判 2,000字以上（原稿用紙５枚以上）
2．保証人と連署した願書　3．卒業証明書
4．履歴書　5．推薦書　6．健康診断書

令和３年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

令和４年１月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会
〒234-0053　横浜市港南区日野中央１丁目12番９号
TEL.045-845-1371　FAX.045-846-2000

第35回生

横浜善光寺留学僧募集

令和4年度・2022

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。
ご希望の方はご応募ください。
詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。

ZENKŌJI
YOKOHAMA

催事案内

善光寺では、坐禅会をはじめ様々な催事を行っております。

今年は新型コロナウイルス感染症拡大予防の為、二月後半からの催事を休止と致しました。再開希望の声も多く頂戴しておりますが、感染拡大の状況をふまえ四月からの再開を予定しています。来年は再開を目指しますが、感染拡大の状況によっては休止する場合もあります。

お問い合わせの上、お越し下さい。適時、掲示板やホームページ等でもお知らせ致します。

宜しくお願い致します。

尚、「論語からのお話」につきましては、講師の都合により、しばらくお休みとなります。ご了承下さい。

お申込み・お問い合わせ

善光寺　〒二二三四-〇〇五三
横浜市港南区日野中央一―十二―九
電　　話：〇四五―八四五―一三七一
ＦＡＸ：〇四五―八四六―二〇〇〇
Ｅメール：info@zenkouji.net
ＵＲＬ：http://zenkouji.net

2021年 坐禅会年間予定

■早朝参禅会 毎月第１日曜日 朝６時から

１月　お休み	７月４日（日）	午前 5：45　集合 6：00～　坐禅・読経 7：30～　解散
２月　お休み	８月１日（日）	
３月　お休み	９月５日（日）	
４月４日（日）	10月３日（日）	
５月２日（日）	11月７日（日）	
６月６日（日）	12月５日（日）	

早朝参禅会参加ご希望の方は、前日午後７時までにご連絡下さい。

■日曜坐禅会　毎月第４日曜日　午後２時から

１月　お休み	７月25日（日）	午後 2：00～　準備・指導 2：20～　坐禅 3：00～　提唱 4：00頃　閉会
２月　お休み	８月22日（日）	
３月　お休み	９月26日（日）	
４月25日（日）	10月24日（日）	
５月23日（日）	11月28日（日）	
６月27日（日）	12月26日（日）	

提唱は水庭浩章老師（山梨県長泉寺住職）による『正法眼蔵 現成公案』

参禅ご希望の方はご連絡下さい。当日でも結構です。

※感染拡大の状況をふまえ４月からの再開を予定しています。

それぞれ日程は寺の行事によって変更があります。
服装はゆったりとしたもの。靴下は履きません。
時計やアクセサリーは、はずして下さい。
参加費はすべて無料です。

写経会

写経は仏教経典を書写することです。

自らの信仰を深めるだけでなく、ご先祖の供養、あるいは諸願成就の祈りを込めて行う一つの修行です。上手い下手は関係なく、お経を一文字一文字心をこめて書き写す中で、自己と見つめ合い本来の姿に気づいていくことが写経の最大の功徳です。心を調え、ともに写経してみませんか？

◎3月までお休みです。
4月から

【日時】毎月第4金曜日
午後2時より1時間半

【場所】善光寺不動殿

【指導】永島南翠先生

※お手本・筆・硯・墨・写経用紙なども一式準備します。ご自分の道具を持参されても結構です。

※参加ご希望の方は準備の都合上、ご連絡下さい。当日でも結構です。

※感染拡大の状況をふまえ、4月からの再開を予定しています。

書道教室

書は十人いたら十通りの書き方があります。とても丁寧に書く人や、走り書きでせっかちな字など、その人の個性が溢れ出るものです。しかし、その個性を受け入れられず、字に対して劣等感を抱いている方も少なくないでしょう。善光寺では仏様に見守られている中で書道教室を開催しています。仏様の前では、誰もが互いを否定することなく、わけ隔てのない心となります。初心者の方も経験者の方も、大人も子どももみんな一緒になり、仏様とともにお互いの垣根をこえて書に向き合えるのはお寺ならではの魅力です。一度、お寺の書道教室に来てみませんか？

◎3月までお休みです。
4月から
【日時】毎月第1・第3土曜日
午後1時より3時
【指導】吉田翠華先生
【参加費無料】（お手本代 ¥480／月）
※参加ご希望の方は、ご連絡ください。
※感染拡大の状況をふまえ、4月からの再開を予定しています。

ご詠歌教室

梅花流御詠歌とは、お釈迦さまや祖師方を讃え、ご先祖さまを敬うこころを旋律にのせてお唱えするものです。最初に発声した人の音程に合わせてお唱えいたします。一人がみんなに、みんなが一人に合わせることで成り立つのが御詠歌の持つ良さです。そこには上手いも下手もありません。ご指導して下さる渡邊清徳先生のお唱えは、それだけで心救われ、歌とともにみ教えが体に染み込んでゆくようです。

善光寺御詠歌教室では、いきなり法具を持つことはせず、お唱えを中心に、その中に込められたみ教えとともに、先生が優しく教えて下さいます。ただひたすらに仏様の教えを歌に乗せてお唱えする。支え合いながら一つになる。御詠歌の素晴らしさを一緒に味わいましょう。

【講師】栃木県高徳寺副住職　渡邊清徳老師

※3月までお休みです。

※感染拡大の状況をふまえ、4月からの再開を予定しています。日程についてはお問い合わせください。

華道教室

華道と禅の修行はとても似ています。心を調え、花の命と向かい合うことで、そのもののもつ本来の美しさが導き出されるのです。作品は自らの心の現れ。心がざわつけば花も乱れ、欲望に満ちていれば五月蝿いものとなります。逆に、心が調っていれば花の良さを活かした作品となっていく。花と向かい合うことで自分を知ることができるのです。花材は、毎回、先生自ら市場に足を運び、選定し、その季節の良さを盛り込んだ新鮮なものを揃えて下さいます。生けた花材は、家に持ち帰ってご自宅で生けることも可能です。指導していただく先生は、たちばな賞連続受賞歴を持つ、池坊正教授一級師範、本多輝隆先生です。経験豊富で知識も多く、花にまつわる風習や、花言葉など、様々な角度から生花を捉え、楽しみながら華道を教えて下さいます。華道教室に参加して、自らの人生に華を添えてみませんか？

◎3月までお休みです。

4月から

毎月第1・第3火曜日　午後2時～3時

※感染拡大の状況をふまえ、4月からの再開を予定しています。

【参加費無料】

お花代として、毎回 千円（花材によっては一五〇〇円）ご準備ください。

指導：本多輝隆先生

池坊正教授一級師範

華道教室「花塾」

（港南区丸山台）

※参加ご希望の方は、一週間前までにご連絡ください。

やすらぎ寺子屋
～ほとけの教えに親しむ～

やすらぎの郷霊園では、毎月「やすらぎ寺子屋」を開催しています。

お釈迦さまや祖師方のお言葉に触れ、共に学びあい、仏の教えを日常に取り入れて心やすらかな日々を過ごす。そのきっかけになればと始めたものです。約一時間の内、前半は椅子坐禅、後半は法話。その後、茶話会となります。お気軽にお問い合わせ下さい。

毎月第三日曜日　午後２時～３時

場所：横浜やすらぎの郷霊園管理事務所二階

横浜市旭区上川井町1749-1

電話045-924-0210　FAX045-924-0239

Eメール　info@y-yasuraginosato.jp

URL　y-yasuraginosato.jp

参加費は無料です。

2021年 やすらぎ寺子屋年間予定

１月はお休みです。	７月18日（日）
２月はお休みです。	８月はお休みです。
３月はお休みです。	９月19日（日）
４月18日（日）	10月17日（日）
５月16日（日）	11月21日（日）
６月20日（日）	12月19日（日）

※感染拡大の状況をふまえ、４月からの再開を予定しています。

育英会寄付者

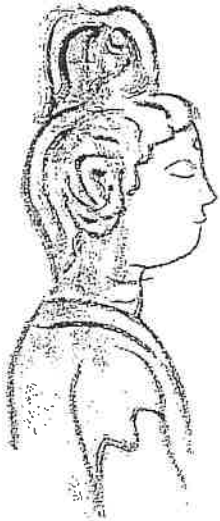
■令和元年十二月～二年八月

港北区　瀧澤武雄殿
港南区　南　有里殿
港南区　池田耕三殿
港南区　森　ふじ子殿
港南区　濱中幸子殿
厚木市　浅摩泰真殿
鶴見区　坂本政枝殿
柏　市　伏見邦弘殿
平塚市　山口義男殿
都筑区　阿部匡宏殿
港南区　鳥居　悟殿
港南区　佐藤和彦殿
高槻市　東郷　敏殿

都筑区　唐戸清子殿
港南区　千葉佳子殿
磯子区　小澤正気殿
台東区　翠雲堂本店山口肇殿
港南区　日野石材工業協同組合殿
緑　区　豊島節夫殿
町田市　鈴木幸雄殿
川崎市　宮田富夫殿
新宿区　真清浄寺殿
金沢区　太寧寺山本浄月殿
戸塚区　福泉寺岩波弘道殿
茨木市　安井隆同殿
品川区　桐ヶ谷寺黒田純夫殿
大田原市　光真寺黒田泰弘殿
新宿区　東亜建設工業㈱殿
東近江市　正瑞寺田中智誠殿
港南区　㈱せんざん山泉篤殿

西多摩郡　宮田林産㈱　殿
戸塚区　冨士哲也　殿
厚木市　伊藤信子　殿
　　伊藤由美子　殿
上田市　大圓寺石黒玄章　殿
旭　区　半澤範之　殿
港北区　伊藤雅章　殿
旭　区　阿部毅正　殿
金沢区　高橋則孝　殿
港南区　桂川正克　殿
富山県　浅香　恵　殿
戸塚区　野辺義文　殿

ありがたいご寄付を賜り、
心より厚く御礼申し上げます。



普門寺からのお便り

ドイツ　普門寺　中川　正壽老師

《二月九日》

お変わりなく御健勝のことと存じます。

過日は泉岳寺様にて皆様方と久しぶりに顔を合わせることが出来まして、亡き方丈様に感謝いたしました。小坂老師には若輩未熟者の私ごときにいつも誠心をもって接していただき、深く感謝しております。

さて、三月末にお伺いさせていただくつもりでおりましたが、旅行そのものを取りやめることになりました。お詫び方々ご報告いたします。

この度のコロナウイルスへの心配が第一ですが、今回は二十人となって旅行会社を通していました。そのため一ヶ月を切ってからキャンセルすると一人ひとりに二千三百ユーロかかってしまいます。それまでは飛行機キャンセルするだけですので三百ユーロです。

今の状況で一ヶ月後の状況を判断するのは無理ですが、幹事役の三人全員が中止に傾き、また旅行全体を取り仕切りガイド役まで引き受けてくださっている佐藤慧真さんも中止が妥当との意見でした。しかし皆に尋ねたところ、幹事以外は全員旅行実行の希望でした。……団体旅行は骨が折れます。

私の心配はウイルスにかかるよりも、それによって隔離されたりすると、旅行後のびっしりのスケジュールが果たせないことが心配でした。ちなみに予定されていた旅行のあとは四月はじめから七月の第三週まで毎週コースがあって、空いている週末は一つもありません。どのコースも私の担当です。この頃は例年このようにな

っています。文句はありませんが身動きできません。その分九月半ば以降ひと月余り自分のコースは無しにしています。

よって四月の宮崎禅師十三回忌には行くことができません。ちょうど四日間の週末接心が組まれており、毎春この接心には四十人ぐらいの参加者が来ます。十三回忌はわかっていましたが、三月に本山参籠となるので、四月には帰国しないとしてお授戒のこの日もコースを組みました。いまこれをキャンセルすることは出来ません。普門寺にある禅師様の真像とお墓にお詫びしております。

ついでに大したこともない一文ですが「非僧非俗」を添えます。自分の寿塔(じゅとう)について元旦に一文草したのですが、こちらはドイツ語でまだ邦訳していません。(※邦訳掲載あり)

ニュースではこの冬米国ではインフルエンザが猛威を振るい、すでに千九百万人がかかり、うち一万人超が死亡しているそうです。コロナウイルスどころではありません。

今回の涅槃会接心は参加者が少なく八人だけでした。

暖かい日が続き、そのあと時速百三十キロぐらいの大風があって雪となり、またそれが早々と消えてゆくということを繰り返しています。雨が降らず地下水が極端に少なく、早々農作物や森の木が心配されています。日本はいかがでしょうか。

以上お詫び方々身辺報告いたしました。

御山内つつがなくお過ごしいただけますように祈念致します。

合掌

非僧非俗

僧にあらず、俗にあらず。出家ではない、か

といって在家でもない。
出家でないとは肉食妻帯勝たるべしの在家の生活をしているからである。しかし在家ではないとは肉食妻帯であろうともなかろうとも、まず第一に法のために生きる、四弘誓願の菩薩道を生きることがすべてであるからである。よって在家の生活形態であっても実際には菩薩道としての出家を生きていることになる。

世界中の仏教圏にあって唯一日本だけがこの形態を取っている。もっともこの頃はこの形態が日本より世界に微々たるものだが徐々に広まっている。世界的に認知を受けているとは言い難いかもしれないが、徐々に知られていることは確かであろう。
非僧非俗は大乗仏教の見地からすれば、大智の故に非俗、大悲の故に非僧、とも言えるであろう。

さらに、根本無分別智によりつねに解脱を重ねてゆくが故に非俗であり、後得清浄世間智によって慈・悲・喜・捨の「四梵住」、布施・愛語・利行・同事の「四摂法」を実践しつつも、証上の修としての和光同塵を生活するが故に非僧である。
これを具体的に生活できるのは日本僧尼であるからである。
しかし非俗の大智による解脱がなければ、非僧の利他行はありえない。これは次のようにも言えるであろう。
第一に戒によって支えられる定がなければならず、そして定が確立していなければ智は発せられず、よって解脱という無我ではなく破戒の無慙愧となる。これでは非僧にして苦、非俗にして苦となる。
僧体、俗体に関わらない大乗仏教の菩薩道の真髄は、そしてこれこそ世界に先駆けて日本仏

教がなすべきことであるのだが、大智による大悲の実践である。

これは理屈ではない実地の実践である。また修すべし、論ずべからず、求むべからずでもある。

道元禅師のお歌をお手本にこう言えるであろうか。

愚かなる我は佛にならずとも
衆生を渡しいのち果てなん

壽塔あるいは骸骨の踊り

私は教会の墓地にある生前に立てる墓としての自分の小さな塔の前に立つのが好きだ。といっても石一つなのだが。そこは静かさと平穏が立ち昇り、自分の中でものごとがはっきりとしてまたやすらぎに満ちる。これはおそらく禅で云うところの「髑髏裏の眼睛」の智慧が沸き起こるからであろうか。

人は「髑髏裏の眼睛」をもって、つまり是と非を離れ、愛憎から解き放たれて、はじめてやっとすべてを明らかに見ることができる。

人間劇場から出てきてやっと、すべてが愛され祝福されているという、「ただあること」に落ち着く。

生と和み、死と和む。
生を生にまかせ、死を死にまかす。
とならば一体何が残っているというのか。

「わたしの」髑髏？
とんでもない。
それは昆虫や虫たちが空っぽとなった
目の穴をあちこちと這い回る
遊ぶためのボールだ。

私の塔は盡十方世界宇宙における無の表現に外ならない。なぜなら私の死も無であり、そしてこの無は闘争や喧噪から遠く離れた「平和の苑」における永遠のやすらぎである。
（ドイツ語では墓地はフリートホーフと言うが、ホーフは苑であり、フリートは平和、やすらぎを意味する）。

自分がまだ十六か十七の高校生の時に、あるヴィジョンを体験した。
階段があって、それは地上から宇宙の何もない空間に向かって延びていた。満月の夜で、ひとつの骸骨がその階段を上がって行く。その骸骨が自分のほうに首を回した。その目の穴を通して月がたとえようもなく美しく輝いていた。それは生と死を越えた、時空を越えた、冷たい永遠の美しさであった。
そしてこの骸骨は自分自身であった。その骸骨が自分を見る、一方自分はその骸骨を見る。骸骨は、私が骸骨の中に自分を見るように、そう私たちが私たちの中に自分を見るように、私の中に骸骨自身を見る。そう私は見るものと見られるものがひとつである自己そのものであった。
私たちは皆この骸骨つまり無である。踊っている骸骨、眠っている骸骨、歩いている骸骨、愛し合っている骸骨。つまるところ全世界はかのやすらぎに満たされている、なぜならただかの骸骨が生きているだけなのだから。そうかの禅者、一休や良寛が歌ったように。

私の塔は、すべてが無であり無がすべてである盡十方世界宇宙の表現である。

愛？

愛とは、人がもはやなにものにも欲望煩悶することなく、思いやりとやすらぎに開かれてあることだ。というのも人が欲情や欲望で手に入れたりそれをいつまでも持っていられるものなど何もないからだ。

この道理をよく認識してかの放下（穏やかな落ち着き）にあること、そこから欲望ではない真の愛が生まれる、その愛が私たちすべてにやすらぎを与えてくれる。

この愛においてはすべてが一つであり、生もなく死もなく、私もなく他もない。

さあさあみんな私のパゴーダに
やっておいで。
良寛の詩にある骸骨のように、
歌おうじゃないか、踊ろうじゃないか。

追　記

生前に立てる塔「壽塔」とは坐禅にほかならない。それは「やすらぎの苑」がやはり坐禅そのものであるのと同じである。

一九八五年二月

道成なりぬ陽は春めきて
対岸の草はむ野鹿すがたやさしも

一九八八年十月

円海定光居士より問はれて答へる歌二首

覚行の中身を人問はば
思量にあらず坐りもてゆく

願行の願の中身を人問はば
自覚覚他の覚行円満

一九八九年二月

ちかひ

もろびとの恩を受けてぞこの日あり
報わざらめやいのちのかぎり

二〇一九年一月二十三日

縁（えにし）

さすたけの君はいかにぞおはします
沫雪（あわゆき）積もる庭に降り立つ
来たれ君過ぎ越し幾世いまここに
共にありしを共によろこぶ
君なるはわれに縁（えにし）のよろづびと
安らぎ祈り幸を願へり
わがいのちよろづの君に捧げんと
誓ひ歩みていまは七十路ぞ
佛（ほとけ）の府（や）大悲の御山（みやま）わが祈り
捨身願行君に幸あれ

《六月二十五日》

この度は育英会募集要項等お送りいただきありがとうございました。

日本にあってもコロナ感染で難儀なことと思いますが、当地にあってもいろいろな規制に従わざるを得ず、センターの運営としては容易ではありません。ましてや第二波が来た場合など、社会のあらゆる面で難儀しております。幸い在家参禅者サンガがしっかりしており、まずは何とか過ごしております。

御地におかれてもご山内ご健勝にてお過ごしのほど祈念申し上げます。

合掌

育英生からのお便り

埼玉県　真野　大成師
（第十四・十五回生）

前略　ご無沙汰を致しております。先日の法要には折角ご案内の一端に加えて頂きながら出席できず失礼致しました。久しぶりに皆さまのお顔を拝見したいなとも思ったのですが、時節柄会ってもお喋りを楽しめる状況ではないので思い止まりました。

そこでいつも一方的に気に懸けて頂くだけでなく、たまには当方からもご挨拶せねばと思い、代わり映えのしないものですが、野菜を少し送らせて頂くことに致しました。厨房の体制がわかりませんので、もし手に余るような物でしたらお赦し下さい。小さい方の果葉はハヤト瓜といいます。少し味に癖がありますが、瓜もみのような形で食すことができます。田舎者はこのようなもので露命を繋ぎ大地に根ざし質実剛健に日々を過ごしている訳です。

サンガの集まりでは、ハッタバットと言って、お互いが前腕以内の距離に身を寄せ合うことが要求されています。お釈迦さまも今日のような事態は予測されていなかったのでしょうね。

未曾有のことで何かとご苦労の多いことと思いますが、どうぞご自愛を忘れずにお勤め下さい。お寺の皆さまにもよろしくお伝えください。

早々

二回目の宗教会議に出席

石川県
大乗寺山主　東隆眞老師

恭敬『成寿』第四十九号拝受いたしました。ありがとうございます。早速すみからすみまで拝読いたしました。このたびはページ数も内容もとくに突出しているかのように感じられました。御母上様をはじめ山口様など皆様のお元気なお姿を拝しうれしく思っております。

私は令和元年十一月十四、十五日はアゼルバイジャン共和国アリエフ大統領に国賓として招かれて二回目の宗教会議に出席し、講演いたしました。次回は健康上の都合で無理でしょう。ともあれ日本の仏教徒としては私が初めてです。

一層の御精進をお祈りいたします。御母上様によろしくよろしくお伝えください。

当山の貴重な蔵書に

京都市
清水寺貫主　森清範様

謹啓　貴下益々御清祥の段大慶に存じ上げます。

平素は当山に対し格別のご懇情を頂き、尚その上此度は

『成寿』第四十九巻を御恵贈下さり、誠に有り難うございます。当山の貴重な蔵書として納め、教学の糧とさせて頂きたく、寸書をもって御礼申し上げます

合掌

先代の信念がよみがえり

神奈川県
宮本延雄先生

謹啓　御山内御一統様御清祥にて四衆接化の御事大変至極に存じ上げます

このたび貴寺教化教学の伝道誌『成寿』第四十九春季号を御恵贈賜りまして有難く厚く御礼申し上げます。

寺檀和合の実践行、春夏秋冬の催事、先代大和尚のアーカイブ「心の時代」、なつかしく往時を想い先代黒田武志老師の信念がよみがえりました。

御山内の一層の御興隆を御祈念申し上げます。

末筆ながら御母堂様によろしくお伝えください。

合掌

お慶びの笑顔が浮かぶ

静岡県
少林寺東堂　井上貫道老師

謹啓　『成寿』第四十九号を御送付下さり恐れ入ります。

善光寺様開創五十年の慶事の様子が読みとれ皆様のお慶びの笑顔が浮かびます。この間のご苦労と積み重ねられた努力に感無量のものがあります。

清水寺貫主様のご法話、秋彼岸法話、そして先代武志老師のＮＨＫ「心の時代」の文面を拝し一人の人がその志を強くする時、思いもかけぬ大事が成就する不可思議を実感しております。益々のご清栄をご祈念申し上げます。

敬具

先代の覚悟と理想に凄さを

神奈川県　佐々木宏幹様

謹啓　このたびは『成寿』第四十九号を御恵贈下さり、誠に有り難う存じました。善光寺様の多岐にわたる活動にはいつも敬服いたしております。

今号ではかつてNHKラジオ深夜便で放送された先代武志老師と金光寿郎氏との対談を取り上げられており、武志老師の僧としての覚悟と理想がよく顕われており、凄さを感じました。

貴師の今後の益々の御活躍を念じております。

九拝

先代様とご尊母様のご縁

長野県　大圓寺住職　石黒玄章老師

拝復　この度も「成寿」ご恵送頂き厚く御礼申し上げます。善光寺開創五十周年誠におめでとうございます。先代さまとご尊母さまのご縁が多くの檀信徒の皆さまを仏の世界にお導きになり、現住博志住職が、更なる発展を続けているお姿に、これからの世界平和、安寧を願い、益々のご活躍をご祈念いたします。

合掌

九十三歳の誕生日に

北海道　古谷宥恵様

拝啓　横浜善光寺さまへ

毎日ご苦労さまでございます。この度は『成寿』のご本お送り下さいまして誠にありがとうございました。

ありし日の主人がお世話になりましたこと、唯々有難くお礼申し上げます。その時は、お寺の墓地、歩道、ただ一心に汗と涙、手を合わせて歩きました。今は仏前と横浜善光

寺様から頂いた免証に朝夕手を合わせております。

北海道函館は今年暖冬と言っておりますが、年寄りにはまだまだ春が遠いです。

ご寺院のみなさま、お体を大切にお励み下さいますようお祈り致します。

令和二年三月三日　私の九十三歳の誕生日です。

合掌

般若心経を毎朝仏様に

横山典子様

今年も早いものでお盆の季節になりまして、世間の声もあり、どうなさるかしらと案じて居りましたが御親切な御案内を頂き感謝申し上げております。

私は年と共に歩けなくなり眼も悪く字も書けなくなり情けなく思っております。頭はもっと悪い様です。どうかよろしくお願い致します。

般若心経だけは毎朝仏様にあげております。

自宅で家族揃ってご供養

城下和子様

お手紙ありがとうございました。

お経本その他ありがたく頂戴致します。

残念な事に春彼岸のご法要に続き盂蘭盆施食ご法要にもお伺い出来ず大変残念でございますがどうぞよろしくお願い申し上げます。

六月二十七日はお寺様のご法要に合わせ自宅にて家族揃ってご供養を勤めたく存じます。

梅雨に向かいご住職様はじめ皆様ご多用の中どうぞお体を大切にお過ごしくださいませ。

天からの贈り物

千葉県
藤田正子様

今、世界中で「コロナ」の問題でひどく暗い、苦しい、難しい話で一杯です。個人ではどうすることもできないゆううつな気分でいる時に突然天からの贈り物が私のところに届きました。『成寿』です。……いつものように表紙には絵の師であった伊藤三喜庵先生の美しい仏様が描かれており、今回は住職様の法話「こころの耳を澄ませて」をしみじみ感動しつつ拝読いたしました。

また、住職様お父上であられた黒田武志先生のNHKラジオのお話は、まるですごいドラマを見ているような想いで、つくづく懐かしく、又すばらしい方であったと感激しました。

本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

「ASAKA文庫」十年

富山県
浅香　恵様

前略　『成寿』第四十九巻を送っていただきありがとうございます。いつもながら心が洗われます。

善光寺開創五十周年おめでとうございます。

私は乳がんの再発におびえながらもタイの少数民族アカ族の支援をしており、「ASAKA文庫」は十年をむかえます。読書会や図書館の読み聞かせのボランティアもがんばっています。

善光寺様、育英会様の益々の御繁栄をお祈り申し上げます。これからも御指導をよろしくお願いいたします。

かしこ

一層の御発展を祈念

東京都
磯村啓子様

『成寿』第四十九号拝受致しました。有難うございます。

一九九九年ＮＨＫ「ラジオ深夜便」で放送されました先代方丈様のお話の再録を読ませて頂きました。

尚一層の御発展を祈念致しております。

ＬＡ禅センターへ

愛媛県
等覚寺　朝雲妙子様

前略　この度は『成寿』をご恵贈頂きまして誠にありがとうございます。息子にこのような機会を勧めて頂いた多福院様、ご支援頂いた善光寺様には感謝致しております。

私事ですが、一月十六日にＬＡ禅センターへ行き、着後、多福院様の訃報を知り、三十年前、共に修行した恵玉老師様、月照様や皆さんでご冥福を祈り、偲びました。禅センターでも先日中陰法要をされたそうです。

息子は禅宗寺様や臨済寺様、他宗派にかかわらず交流させて頂き、充実した日々を過ごさせて頂いており、このご縁を近い将来、社会にお返し出来るよう望むところです。

お礼まで

窮屈な毎日、早速「写経」

神奈川県
佐藤康雄様
初枝様

三寒四温の中、例年より早い桜の開花となりましたが毎日ウイルスのニュースに何とも閉塞感のある今年の春に晴

れやかな気分になれません。
五輪も来年に延期となりましたが、選手の方々は勿論関係者の皆さんのお気持ちお察しいたします。
写経日三月、四月お休みのお知らせありがとうございます。
世界的に広がっている昨今、何処にも出掛けない私共ですが怯えています。
桜を愛でるのもテレビで済ませます。
季節柄どうぞご自愛くださいませ。
恐ろしいコロナに怯えながら今年もはや六月を迎えます二十九日「お盆案内」いただきました。いつもお世話様でございます。
窮屈な毎日、早速「写経」を主人は書いていました。「何枚でもコピーしてあげるからね」と言ったところです。
九十三歳の勤めていた頃の先輩から自作のマスクが近況のおたよりに同封されていて、元気をもらいました。
熱中症に要注意とか。
皆様どうぞお大事になさってくださいませ。
★写経会の参加連絡をハガキで毎月送ってくださいます。

八十六歳でも頑張って

お名前記載なし

近頃坂が大変になり、足が軽やかに前へ進めなく、お寺さんと墓参りが大変。細が亡くなり一人で生活しています。囲碁とスイミングに励んで一日一日を過ごしています。
最近はコロナウイルスでマスクをしろ、手を洗えと大変です。八十六歳でもがんばってゆきます。

「能の楽しみ方」を企画

東京都
㈱びゅうトラベルサービス
大人の休日ジパング倶楽部
趣味の会・東京　石井香様

拝啓　春寒の候ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

弊社の「能の楽しみ方講座特別企画　寺院水墨画と能のゆかりの地めぐり」の際には、大変お世話になり誠にありがとうございました。

皆様大変貴重な臨照図を拝観でき、大変喜ばれていました。一連の多大なるご協力に感謝申し上げます。当日お撮りしたお写真をお送りいたします。

私の至らぬ点も多々あったかと思いますが、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

敬具

編集後記

○成寿五十巻お届け致します。今号は先代方丈様の十七回忌法要と観音堂観世音菩薩像開眼式を特集致しました。法要開催の判断にはとても悩みましたが何事もなく執り行うことができ安堵致しました。焼香師をお勤め頂いた戸塚区倫勝寺ご住職馬場義實老師、お墓での導師をお勤め頂いた観音寺ご住職黒田法正老師には温かいご法語ご挨拶を賜り厚く御礼申し上げます。また規模を縮小しての法要とはなりましたが、ご随喜頂いたご寺院様、来賓、総代など関係の皆さまに心より感謝申し上げます。

○新しく観音さまをお迎えすることが出来ました。コロナ禍での観音堂普請にご苦労された佐藤薫工務店様に感謝申し上げます。善光寺への入り口、その景観が大きく変わりました。外からもお参りできる観音さま。「この観音さまは多くの人々を救う仏さまです」と住職。どうぞ皆さまお参り頂きご縁をお結び下さい。

○今年は新型コロナウイルス感染症の影響で、「いつもと違う、春・夏・秋そして冬」。折々の行事、イベントの中止や延期。大切な区切りが曖昧になり残念な思いをされた方も多かったと思います。当たり前にあった普段の生活がいかに有難いかを感じる日々です。

○「おうちで写経・写仏のすすめ」、皆さま楽しみながら取り組んで下さり、有難い限りです。今後も継続して参ります。途中からでも大丈夫です。皆で心穏やかに過ごしましょう。バックナンバーもありますので、お気軽にどうぞお声かけ下さい。

○来年の新年祈祷会は初めての試みとして、回数を増やし一座の人数を制限しての法要を執り行う予定です。三密を防ぐという対策でこのような形となりますが、変わらずに皆さま方の一年の家内安全を『全集中』でご祈念申し上げます。

尚、檀信徒の皆さまには別途ご案内申し上げました通り、二日間計九座を執り行った後に大元組様による和太鼓奉納演奏を行います。今回はその模様をライブ中継する予定です。左記QRコードもしくは、ホームページよりご覧頂けます。初めての試みです。皆さま方のご感想、ご意見等もお寄せください。

横浜善光寺の
Youtube チャンネル

成寿　第五十巻
令和二年十二月二十日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野中央一丁目
十二番九号
電　話〇四五（八四五）一三七一
ＦＡＸ〇四五（八四六）二〇〇〇
印刷所　㈱中外日報社

横浜善光寺